

國立台灣大學文學院日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master Thesis

日本語における近現代中国語からの語彙に関する考察

—麻雀用語を中心に—

Japanese Vocabulary Borrowed from Modern Mandarin

-Focusing on Mahjong Words-

The seal of National Taiwan University is a circular emblem. It features a central design with a bell and two arches, surrounded by the university's name in Chinese characters: '國立台灣大學' at the top and '勵學勵人' at the bottom. The author's name '姚丞倫' is printed in the center of the seal.

姚丞倫

Cheng-Lun Yao

指導教授：林立萍 博士

Advisor: Li-ping Lin, Ph.D.

中華民國 101 年 1 月

January 2012



國立臺灣大學碩士學位論文
口試委員會審定書

日本語における近現代中国語からの語彙に関する考察
— 麻雀用語を中心に —

本論文係姚丞倫君 (R97127001) 在國立臺灣大學日本語文學系、
所完成之碩士學位論文，於民國 101 年 1 月 18 日承下列考試委員審查
通過及口試及格，特此證明

口試委員：

林正偉

(簽名)

(指導教授)

王敏東

鍾季儒

系主任、所長

陳明姿

(簽名)



謝辭

本篇論文的完成，首先最要感謝指導教授—林立萍老師，以及兩位口試委員—王敏東老師及鍾季儒老師。從大一日文習作課程開始，林立萍老師的親切形象即深刻地留在我心中，而在論文完成的過程中，林老師除給予許多建設性的建議外，也十分著重於讓我理解正確的研究方法及琢磨寫作技巧。而在短時間內勞煩王敏東老師及鍾季儒老師撥空審查，對我不吝指正許多自己未曾發現的問題及錯誤，才能讓本篇論文得以以現在的形式完成，再度對三位老師致上最高謝意。

此外，也要感謝台大日文系，特別是徐興慶老師在任內推行研究生出國發表制度，讓本篇論文的原形得以在日本九州大學共同發表會上見世，並得到啟發本篇論文的完整架構的靈感及研究方向。而有幸兼任系上編輯助理的期間，除使我經濟上不虞匱乏外，也使我有難得的機會接觸他校日文系老師及累積與他人協力合作之經驗，特別是對包容我粗心性格的老師及職員們，再度致上感謝之意。

最後，我還要感謝父母以及社團的朋友，在論文完成的過程中一直給我助力，社團的朋友扮演了我大學時代以來的精神支柱，讓我能在枯燥的研究過程中得到許多額外的樂趣，而父母除提供我經濟上的援助，又一向鼓勵我多方發展，我也才能依照自己的興趣進入日文系並順利從研究所畢業，再度致上深深的感謝。

另外，關於本篇論文研究題目「麻將」的雜談，身為台灣人，逢年過節家人和親戚們總是不免俗地會打上幾圈麻將，由於自小耳濡目染，麻將對我來說並不是一個陌生的遊戲，但其實我一直覺得「麻將」是個不怎麼有趣而且是一個純粹靠運氣的遊戲，直到我接觸了日本麻將才有所改觀。會這樣說是因為台灣麻將比較特殊使用 16 張（中國、日本、香港麻將使用 13 張），因此幾乎沒有所謂造牌的概念，而造成一把大三元竟然比不上屁胡自摸點數的奇異現象。此外，台灣麻將

中還存在有一些諸如「上家捨牌或聽牌時不能槓（想槓上開花或十八羅漢錯了嗎）」、「當巡過水不能自摸（由於捨牌不排列，有何證據誰打過）」、「眼牌」、「見花見字」等陳年陋規或過於簡化的規則，加上幾乎有金錢賭注，常給人帶來金錢授受的刺激更甚於遊戲本質趣味的倒錯感，也導致麻將在台灣難登大雅之堂。

反觀日本麻將，日本人不但發明了自動麻將桌，更成立了許多職業競技聯盟，讓打麻將也能像下圍棋一樣可以是一種職業，並將許多數據科學化，意圖將麻將賭博的印象轉化為一種趣味競技。而在規則上，日本麻將更存在攻守及造牌的概念，一個人個性也常常會在牌桌上展露無遺，因此比起金錢授受的刺激，與朋友間交際的趣味性更勝一籌。此外，常說中國老祖宗的發明被日本人發揚光大，麻將就是其中一個很好的例子，也許有朝一日台灣麻將也可以朝這個方向努力。



摘要

日本的麻將用語中使用許多來自近現代中文的語彙，本稿研究目的即在於考察其漢字表記語讀法的成立原因及新漢字音是否可以成立。

麻將用語的漢字表記語中，除有許多不依循以往漢字音的漢字讀法之外，也存在從不依循以往漢字音的漢字讀法變化為依循以往漢字音的漢字讀法。而不依循以往漢字音的漢字讀法，亦即讀法接近現代北京話的漢字讀法之成立原因可分為下列三點：(a) 音韻之新鮮性、(b) 意義之創新性、(c) 源流之制約性，而從不依循以往漢字音的漢字讀法變化為依循以往漢字音的漢字讀法之成立原因亦可分為下列三點：(a) 書寫之便利性、(b) 意義之傳統性、(c) 表現之自由性。

檢視麻將用語中不依循以往漢字音的漢字讀法與其相對應漢字之字音對應關係後，可發現以下四點不安定要素：(a) 訛音及連濁音、(b) 受到以往漢字音影響之漢字讀法、(c) 中國方言（吳語）之影響、(d) 為符合日文之音韻而有所誤差之漢字讀法。排除以上不安定要素後，麻將用語中不依循以往漢字音的漢字讀法之音韻特徵可分為以下四點：(a) 繼承許多宋音・唐音之特徵、(b) 擁有以往漢字音不存在之音結合、(c) 濁音之消失、(d) 一字二音拍之構造。將麻將用語中不依循以往漢字音的漢字讀法與以往漢字音之音韻特徵相比後，可發現其存在一層繼承關係，暗示新漢字音「華音」成立之可能性。

關鍵詞：近現代中文的借用語、麻將用語、語彙論、漢字音、華音



Abstract

Japanese Mahjong vocabulary originated from modern mandarin Chinese; therefore, this paper aims to investigate the cause of Sino-Japanese reading and the occurrence of new Sino-Japanese voicing.

Said vocabulary contains incompliance and compliance with Chinese-character reading while the former refers to voicing in compliance with modern mandarin and the latter refers to voicing that transferred from incompliance to compliance with traditional Chinese. The causes of such incompliance might be concluded as follows: (a) the freshness of phonemes, (b) innovation of significance, and (c) condition of demonstration. The causes of such compliance might be concluded as follows: (a) handy writing, (b) tradition of significance, and (c) liberty of expression.

The investigation of the correlation between incompliance Sino-Japanese voicing and corresponding Chinese-character phonemes of Mahjong words indicates 4 unstable factors as follows: (a) accent and rendaku (sequential voicing), (b) Sino-Japanese voicing impacted by Chinese lexical phonemes, (c) impact of Wu Chinese, and (d) voicing to meet Japanese phonemes. The phonological characteristics of Sino-Japanese incompliance reading excluding said factors are concluded as follows: (a) characteristics borrowed from Sou-on and Tou-on, (b) combination of phonemes not existing in the existing Chinese, (c) sonant disappearance, and (d) structure of mora language. The comparison between the incompliance reading and the phonological characteristics of corresponding Chinese characters of Mahjong words implies the occurrence of new Sino-Japanese pronunciation due to the heritage between the both.

Keywords: words borrowed from modern Mandarin, Mahjong vocabulary, lexicology,

Chinese-character sound, Kaon



要旨

本稿は近現代中国語からの語彙を多用する日本の麻雀用語を中心に、その漢字表記語の読み方の成立経緯及び新しい漢字音が成立する可能性を考察するものである。

麻雀用語における漢字表記語に、従来の漢字音に依らない読み方が多く存在している一方、従来の漢字音に依らない読み方から従来の漢字音に依るようになったものもある。従来の漢字音に依らない読み方、すなわち現代北京語に近い読み方の成立経緯は (a) 音韻的理由、(b) 意味的理由、(c) 出自的理由から解釈することができ、従来の漢字音を取る場合は (a) 書記的理由、(b) 意味的理由、(c) 表現的理由から解釈できる。

麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方の字音対応関係において、不安定要素 (a) 訛った読み方と連濁形がある、(b) 従来の漢字音の干渉を受けた読み方がある、(c) 中国方言（呉語）による影響がある、(d) 日本語の音韻に合わせて改変された読み方があるものを排除する。その結果に基づき、麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方の音韻的特徴は、(a) 宋音・唐音の特徴を多く継承、(b) 従来の漢字音に見られない音結合、(c) 濁音の消滅、(d) 一字二拍（モーラ）の構造と分析する。麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方は従来の漢字音の特徴と連続関係を持っており、新しい漢字音「華音」が成立する可能性を示唆する。

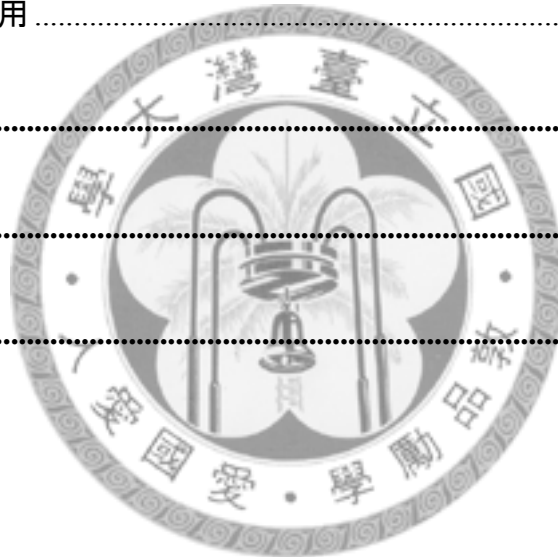
キーワード：近現代中国語からの語彙、麻雀用語、語彙論、漢字音、華音



目次

謝辭.....	i
摘要.....	iii
Abstract.....	v
要旨.....	vii
目次.....	ix
表目次.....	xi
第一章、序論.....	1
1-1、研究動機.....	1
1-2、研究対象.....	3
1-3、研究目的・方法.....	4
1-4、研究の位置づけ及び研究成果の応用.....	5
第二章、先行研究.....	7
2-1、麻雀用語について.....	7
2-2、漢字音について.....	10
2-3、まとめ.....	16
第三章、麻雀用語における漢字表記語の読み方の成立.....	17
3-1、麻雀用語の読み方及び特徴.....	17
3-1-1、麻雀役.....	17
3-1-2、麻雀牌.....	25
3-1-3、一般麻雀用語.....	30
3-1-4、麻雀用語の特徴比較.....	37
3-2、麻雀用語における漢字表記語の読み方の成立経緯.....	39
3-2-1、現代北京語に近い読み方を取る場合.....	39
3-2-2、従来の漢字音に依る場合.....	46
3-2-3、それぞれ読み方の成立理由比較.....	51
3-3、まとめ.....	54
第四章、麻雀用語から論証する新しい漢字音の成立.....	55
4-1、読み方の字音対応関係.....	57

4-1-1、字音対応表	57
4-1-2、原語との落差	62
4-1-3、字音対応関係	68
4-2、従来の漢字音との連続関係	70
4-2-1、読み方の特徴	70
4-2-2、従来の漢字音との連続関係	75
4-2-3、新しい漢字音「華音」の成立	78
4-3、まとめ	81
第五章、結論.....	83
5-1、まとめ	83
5-2、研究制限及び今後の課題	84
5-3、研究成果の応用	85
参考文献.....	87
語例出典.....	89
付表.....	91



表目次

表一	漢字音による読み方の違い	10
表二	漢字音の音韻的特徴（呉音・漢音）	12
表三	漢字音の音韻的特徴（宋音・唐音）	13
表四	漢字音の音韻的特徴	14
表五	麻雀役の読み方	18
表六	麻雀役の読み方の組み合わせ	21
表七	麻雀役の読み方の組み合わせ（古い読み方）	21
表八	麻雀役における現代北京語に近い読み方の変化構造	23
表九	最初から現代北京語に近い読み方をしない麻雀役の用語	23
表十	麻雀牌の読み方	25
表十一	麻雀牌の読み方の組み合わせ（一）	27
表十二	麻雀牌の読み方の組み合わせ（二）	28
表十三	麻雀牌の読み方の組み合わせ（古い読み方）	28
表十四	麻雀牌における現代北京語に近い読み方の変化構造	29
表十五	一般麻雀用語の読み方	30
表十六	最初から現代北京語に近い読み方をしない一般麻雀用語	35
表十七	一般麻雀用語の言い換え	36
表十八	麻雀用語の読み方の特徴比較	38
表十九	従来の漢字音にない音韻的特徴	40
表二十	麻雀用語の漢字表記と一般用語の漢字表記の意味の違い	41
表二十一	麻雀用語を一般用語からの意味推量する例	42
表二十二	現代北京語に近い読み方以外の組み合わせの例	47
表二十三	従来の漢字音に完全変化した麻雀用語	48
表二十四	従来の漢字音に完全変化した麻雀用語の意味	49
表二十五	読み方の成立理由比較	52
表二十六	字音対応表	57
表二十七	複数の読み方を持つ漢字	60
表二十八	共時的立場から見る現代北京語との比較	60
表二十九	通時的立場から見る現代北京語との比較	61
表三十	各言語における「マーじゃん」の表記・読み方の比較	64
表三十一	各言語における「和・胡」の使い分けと読み方の比較	65
表三十二	『三四郎』における外来語表記	67

表三十三	軽唇音 f-と重唇音 p-の読み方による区別	71
表三十四	h-、x-の読み方による区別	71
表三十五	従来の漢字音にない音韻的特徴比較	72
表三十六	一字二拍（モーラ）ではない字音	74
表三十七	現代北京語から借用した読み方を加えた漢字音の音韻的特徴	76
表三十八	転記表記の原則（声母類）	79
表三十九	転記表記の原則（韻母類）	79
付表一	麻雀用語における漢字表記と一般用語の漢字表記の意味違い	91
付表二	字音転記対照一覧表（∅、b、p、m、f、d、t）	95
付表三	字音転記対照一覧表（n、l、r、g、k、h、j、q）	96
付表四	字音転記対照一覧表（x、zh、ch、sh、z、c、s）	97



日本語における近現代中国語からの語彙に関する考察 —麻雀用語を中心に—

姚丞倫

第一章、序論

1-1、研究動機

日本語における外来語¹の伝来は 16 世紀から始まり、最初はポルトガル語とスペイン語が主であった。江戸時代以降、江戸幕府の鎖国政策により、ヨーロッパ諸国において、オランダ以外の国との交流が断絶したため、オランダ語が主流になった²。明治以降、欧米との交流が再開され、外来語の語源も多様になり、現代に至るまで、特に英語を中心にカタカナ表記の外来語が大量に発生している。それが日本語のシステムに与える影響の良し悪しはさておき、着実に日本語における外来語の量が増えている現象が見られる³。

16 世紀から外来語を受容する一連の過程に、西洋からの外来語のみに留まらず、「高粱（コーリャン）」、「姑娘（クーニャン）」、「老酒（ラオチュー）」など近現代中国語からの語も数多く日本語に入ってきた⁴。中には、「立直（リーチ）」、「自摸（ツモ）」、「平和（ピンフ）」、「一盃口（イーペーコー）」、「王牌（ワンパイ）」、「嶺上牌（リンシャンパイ）」などの麻雀用語も、明治末期に麻雀が日本に伝来したと共に日本語に入った。広辞苑や大辞泉で調べると、このような近現代中国語からの語は平仮名ではなく、片仮名で見出し語として表記されてお

¹ 『広辞苑』による外来語の定義は「外国語で、日本語に用いるようになった語。狭義では、漢語を除く。」になる。本稿では外来語を狭義に捉え、漢語を別扱いする。

² 杉本雅子（2001：79）「漢語・外来語」『日本語の歴史』（おうふう）。

³ 宮島達夫（2007：40）「語彙調査からコーパスへ」『日本語科学』巻 22（国立国語研究所）によると、1956 年の「現代雑誌九十種」及び 1994 年「現代雑誌七十誌」の調査では、外来語の延べ語数は 1956 年の 2.9%から 1994 年の 10.7%に伸びたことがこの現象を示している。

⁴ 松村明編（2006）「外来語の原籍」『大辞林』第三版（三省堂）特別ページでは、近代以降日本に入ってきた中国語の外来語を明治、大正、昭和時代と現代分けていることから、本稿ではその定義に基づいて、近現代中国語を明治以降と定義する。

り、その語源が「中国語」と明示されている。すなわち、これらの語は従来の中国語から入ってきた漢語と違って、外来語として扱われている⁵。

しかし、一般の辞書（例えば：広辞苑や大辞泉）ではこのような近現代中国語からの語彙は漢字表記が使用されており、例えば：「老・酒（ラオ・チュー）」「立・直（リー・チ）」に見られるように、表記と読み方がなんらかの字音対応の関係を持っている。中には、例えば：「平（ピン）」、「王（ワン）」、「上（シャン）」のような一般的に認識されている漢字の読み方に従わないもの、そして「面（メン）」、「口（コー）」、「立（リー）」のような一般的に認識されている漢字の読み方との相似度が高いものが見られる。すなわち、このように従来の漢字音と同じく、漢字と読み方との間に一定の対応関係が見られるものの、漢語として扱われないことはいささか違和感を感じる。

したがって、近現代中国語からの語彙は漢字表記が使用される場合があり、いわゆる漢字表記語として扱うことができる。それにもかかわらず、従来の漢字音に依らない読み方に準じているものが多いのはなぜであろうか。また、その読み方は従来の漢字音システム（呉音、漢音、唐宋音）と比べれば、どのような相違点があり、もう一つ新しい漢字音カテゴリーとして成立する可能性があるのかは興味深い課題である。

つまり、麻雀用語は近現代中国語由来の語が多いことから、一つの検証材料としては好都合である。これをきっかけに、麻雀用語を取り上げ、近現代中国語からの語彙を解明する素材にした次第である。

⁵ 杉本雅子（2001：78）「漢語・外来語」『日本語の歴史』（おうふう）。「外来語は文字通り「外から来た語」であるため、広い意味では漢語も外来語に含まれるが、一般的には漢語を別扱いにし洋語およびアイヌ語・朝鮮語・近／現代中国語からの借用語を外来語とする」。また、楳垣実（1963：170）『日本外来語の研究』（研究社）で、日常語に老麺（ラーメン）、烏龍茶（ウーロンチャ）、麻雀（マージャン）など近現代中国語からの外来語が見られると述べられている。

1-2、研究対象

麻雀というゲームは唐代の葉子戯というサイコロゲームにさかのぼり、19世紀半ば、馬吊から派生したカード系の碰和牌と骨牌系の天九牌と融合して誕生したという⁶。麻雀は賭博によく使われているため、イメージとしては良くないが、洗練されたゲームとして長い歴史と文化が蘊蓄されており、中国文化の代表の一つとして挙げられる。

麻雀が日本に伝来したのは明治末期である⁷。大正、昭和に2回のブームを迎え、麻雀人口は2000万人にもいるとも言われている⁸。時代が下がるとともに、麻雀は日本で独自の発展を遂げ、今時日本に広く庶民に親しまれているゲームの一つとなったのである⁹。

麻雀の普及と共に、麻雀用語は単なる理解し難い専門用語にとどまらず、「沖和（チョンボ）」、「連荘（レンチャン）」、「対面（トイメン）」、「聴牌（テンパ）」など、日常語に浸透しているものもある¹⁰。したがって、明治末期に中国から麻雀の伝来に伴い、麻雀用語は近現代中国語からの語彙として日本語に取り込まれたことで、日中語彙交流史に新たな一章を書き上げたとも言えよう。

したがって、本稿は麻雀用語を材料に、その中の漢字表記語を取り上げ、字音対応関係から、どのような特徴が見られるのかを検討することにする。

⁶ 馬吊（マーチャオ）は40枚の札を使う一種のカードゲームである。麻雀博物館編（2005：150）『麻雀の歴史と文化』（竹書房）。

⁷ 倉茂貞助（1972：695）「麻雀」『大日本百科事典（ジャポニカ）』巻16（小学館）。

⁸ 紀田順一郎（1994：660）「麻雀」『ブリタニカ国際大百科事典』巻18 第二版改訂。

⁹ 警視庁生活安全局保安課（2010：17）『平成21年における風俗関係事犯等について』によると、全国の麻雀営業店（雀荘）は13000に上り、パチンコ営業店より上回っているという。

¹⁰ 同じように、中国語においても、「翻兩番」「放槍」「清一色」「大三元」などが日常語によく使われているため、一部の麻雀用語が日常語にも浸透している現象が見られる。

1-3、研究目的・方法

本稿の研究目的は主に以下の二点である。

(一) 麻雀用語における漢字表記語の読み方の成立経緯を究明すること。

(二) 麻雀用語から新しい漢字音が成立する可能性を検討すること。

研究方法として、まずは百科事典、辞書を参考に、麻雀関連書籍、漫画、オンライン麻雀、インターネットから漢字表記語に属する麻雀用語を収集した上に、その字音関係によって、従来の漢字音に依る読み方と従来の漢字音に依らない読み方に分類する。次は従来の漢字音に依らない読み方を含む用語と現代北京語との相似度を検証することによって、その特徴を見出し、(一) 麻雀用語の漢字表記語の読み方が成立した経緯を究明する。最後は、用語から字ごとに抽出し、「立 (リー)」、「平 (ピン)」、「一 (イー)」のように、漢字と字音との対応関係を整理する。それぞれの読み方の音韻的特徴を見出し、従来の漢字音と比較することによって、従来の漢字音に依らない読み方は従来の漢字音システム (呉音、漢音、宋音、唐音) とどのような連続関係を持ち、(二) 新しい漢字音が成立する可能性を検討することを試みる。

1-4、研究の位置づけ及び研究成果の応用

本稿の研究の位置づけは主に以下の二点である。

(一) 麻雀用語の語彙研究。

(二) 近現代中国語からの語彙に見られる読み方の研究。

(一) という位置づけについて、麻雀は賭博というイメージがかかっているため、その用語について討論する研究はマイナーであることは否めない。麻雀用語に触れているいくつかの先行研究は見られるものの、まだ補完できる部分があると考えられる。したがって、本稿は麻雀用語の語彙について、その語彙論を論述するものである。(二) という位置づけについて、従来の漢字音に依らない読み方は日本語における近現代中国語からの語彙によく見られるが、その読み方について討論する研究はあまり見られない。その試みとして、その読み方が多用される麻雀用語を研究することにする。したがって、本稿は近現代中国語からの語彙における読み方について、その特徴及び字音対応関係の規則を研究するものである。

研究の位置づけを踏まえて、本稿の研究成果の応用は主に以下の二点である：

(一) 近現代中国語からの語彙に関する研究の起点にすること。

(二) 近現代中国語からの語彙における読み方の転記法を確定すること。

麻雀用語は数多くの近現代中国語からの語彙が含まれており、一つのジャンルとして自立しているため、その読み方のあり方を解明することによって、近現代中国語からの語彙の読み方の基本的な仕組みを確認できる。これを応用に、ほかの近現代中国語からの語彙、例えば食べ物、現代人名・地名などの仕組みを探れば、さらにその全体像を浮き彫りにすることができる。

次に、麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方の特徴が従来の漢字

音との連続関係を明らかにすることによって、新しい漢字音のカテゴリーが成立する可能性を論証すれば、さらなる研究によって、これを手掛かりに、いまままで曖昧に扱われた近現代中国語からの語彙における読み方の転記法¹¹が定められることが望まれる。



¹¹ 例えば、韓国は国立国語院が公布した文教部告示第 85-11 号「외래어 표기법 (外来語表記法)」の第二章表五の「중국어의 주음 부호 (中国語の注音符號)」によれば、(http://www.korean.go.kr/09_new/dic/rule/rule_foreign_0105.jsp) 中国語からの外来語を表記する際に、どのようにハングルに転記すべきかが提示されている。一方、日本語においては、中国語からの外来語を表記する際に、どのようにカナに転記すべきかというルールがないため、例えば：「中山」は現地読みでは「ジョンシャン」か「ジョンジャン」もしくは「チョンシャン」や「チョンサン」、どれにすべきかは恣意的である。

第二章、先行研究

本章は（一）麻雀用語、（二）漢字音に分けて、それぞれに関連する先行研究をまとめ、本研究との関連性を把握してみる。

2-1、麻雀用語について

麻雀用語に関する先行研究は木村哲也（1994）、金子尚一（1999）、千田俊太郎（2009）が挙げられる。

木村哲也（1994）は主に麻雀用語のカナ表記と原音との関係について論じるもので、麻雀用語には中国語原音（現代北京語）に近いものが多いが、微妙に原音とずれる一部の用語もあると指摘した。前者は「字牌（ツーパイ）」、「自摸和（ツモホー）」、「立直（リーチ）」など、後者は「六（ロー）」、「西（シャー）」、「混（ホン）」などが挙げられる。一方、「三元牌（サンゲンパイ）」、「放銃（ホージュウ）」、「三色同順（サンショクドウジュン）」など日本式の字音読みの用語もあると言及している。そのほか、「一盃口」は中国語では「一般高」、「一氣通貫」は中国語では「一条竜」のような例を挙げ、麻雀用語における日中の違いを提示した。また、木村哲也（1994）は微妙に原音とずれる一部の用語、例えば：「雀（ジャン）」、「二（リャン）」、「和（ホー、フ）」に対して、その読み方の成立に解釈を加えようとした。その解釈として、他の読み方からの類推や混同、発音しやすいなどという理由が挙げられた。これは麻雀用語における読み方の成立及び字音対応を整理する際に参考の依拠になると考えられる。

金子尚一（1999）は、本場の中国が「麻将」を漢字表記に使っているにもかかわらず、日本人が「マージャン」を指すときに、なぜ「麻将」ではなく、「麻雀」を用いるかという問題を提起した。結論として、「麻雀」や「麻将」という

単語自体は無意味で、「雀」が定着化した以上、「意味は音形によってそういうものだ」と一般的に了解されていて、漢字自体の意味の問題などは気づかれていなくなってしまう点ができるおもしろいのである」と述べた。つまり、「雀」が「スズメ」以外に、「マーじゃん」のイメージが固定されていることを示唆した。金子尚一（1999：151）による「麻雀」の漢字表記に「雀」が「マーじゃん」としてのイメージが固定されている理論について、筆者は「漢字のイメージ定着化現象」と呼ぶことにする。しかし、その理論と研究対象は「麻雀」という一語にとどまっているため、従来の漢字音に依らないほかの麻雀用語も「漢字のイメージ定着化現象」という理論で解釈することができるかは、検証の参考依拠になると考えられる。

千田俊太郎（2009）は、「中（チュン）」、「東（トン）」、「対面（トイメン）」、「雀頭（ジャントウ）」など、現代北京語から借用された外来語を「新漢語」と規定し、麻雀用語の語種を「新漢語」、「漢語」、「和語」、「外来語」に分けた。現代北京語から借用された語を「新漢語」に定義する理由として、「語形成上漢語とほぼ同様の扱ひを受け、漢語形態素との相性が良い」が挙げられた。また、従来の漢字音に見られない音結合による音節「シャン」、「ヤオ」、「パイ」を例として、「音韻的には漢語と似るが異なる振る舞ひも示す」と従来の漢字音に依らない読み方があることも説明した。しかし、その論述は一部の例を提示するにとどまっているため、ほかに「シャン」、「ヤオ」、「パイ」のような従来の漢字音に依らない読み方を全般的に提示されていない。

したがって、本稿では木村が指摘した麻雀用語のカナ表記と中国語原音との関係に基づいて、読み方と原音を比較し、原音とのずれを解釈する上に、その特徴を見出す。また、金子が示唆した「漢字のイメージ定着化現象」を手がか

りに、「立直（リーチ）」、「自摸（ツモ）」、「平和（ピンフ）」など、従来の漢字音に依らない読み方の成立経緯を検討する。また、千田が現代北京語から借用された「外来語」を「新漢語」として規定していることは斬新であるが、その読み方の特徴は従来の漢字音の読み方とどのような音韻的相違と連続関係があるかは、麻雀用語の漢字表記語の語例を全般的に提示して検証してみる。



2-2、漢字音について

周知のとおり、従来の日本漢字音は漢字が伝来した時代順によって、大まかに呉音（五―六世紀）・漢音（七―八世紀）・唐宋音（九世紀以降）の三つに分類することができる¹²。そのうち、唐宋音をさらに狭義的に宋音と唐音に分ける説がある。すなわち、同じ漢字でも、語の意味や組み合わせによって違う読み方を持っている。例えば、表一にまとめているように、同じ「経」であっても、その読み方は呉音に「きょう」、漢音に「けい」、宋音・唐音に「きん」で、それぞれ異なっている。簡単に言うと、呉音は仏典、漢音は漢籍、宋音・唐音は中国の宋王朝以降の時代に伝わってきた禅宗や当時の日常器具の語彙に使うのが多く、それぞれ独自の分野がある¹³。

表一 漢字音による読み方の違い

	呉音	漢音	宋音 ¹⁴	唐音
経	経文(きょうもん)	経書(けいしょ)	看経(かんきん)	経用(きんよん)
行	修行(しゅぎょう)	行為(こうい)	行脚(あんぎゃ)	行礼(ひんりい)
外	外典(げてん)	外人(がいじん)	外郎(ういらう)	外頭(わいでう)

呉音・漢音・宋音・唐音において、それぞれどのような特徴があるのかに関しては、数多くの研究成果がある。例えば高松政雄（1986）、沼本克明（1991）はそれぞれの漢字音の成立及び特徴を全体的に論じたものでよく知られている。また、呉音・漢音の対照関係を論述した小出敦（2007：133-156）、宋音・唐音に着眼した湯沢質幸（1987）、唐音の字音対応表を整理した岡田袈裟男（2006）なども挙げられる。以下は先行研究を踏まえ、呉音、漢音・唐音、宋音の順でそれぞれの内容を把握してみる。

¹² 築島裕（1983：775）「漢字音」『国史大辞典』第3巻、吉川弘文館。

¹³ 藤堂明保（1982：161-165）『漢字の過去と未来』（岩波新書）。

¹⁴ 唐宋音をさらに狭義的に宋音と唐音に分ける説がある。本稿では狭義的に宋音と唐音を音韻的に分けることにする。

まずは呉音・漢音について、高松政雄（1986）は中国語音韻学をはじめ、中国の古典にある記載を根拠に、呉音・漢音のそれぞれのルーツをたどり、その読み方のあり方を割り出すことに重点をおいている。例えば三十六字母¹⁵に属する牙音、齒音、舌音、唇音の全濁音に対応して、呉音では濁音になっているが、漢音では清音になり、清音と濁音の区別がなくなったという。このような全濁音が消失した現象は中古漢音における全濁音の無声化に関連しているというように漢字音の成立理論を構成している¹⁶。

沼本克明（1991：7）は呉音・漢音の特徴について、伝来の時代順、「仏典」対「漢籍」以外に、「連濁は呉音に多発のに対して、漢音は殆ど発さない」、「有気音と無気音の区別は呉音にないが、漢音ではそれを区別するものがある」などと指摘した。清音と濁音の区別について、その音韻対照表を作り、例えば：呉音では清音と濁音にハ行とバ行、タ行とダ行、カ行とガ行などの区別が見られるのに対して、漢音では見られないというような音韻的相違を示した¹⁷。

小出敦（2007）は中国中古音をたどり、例えば：「軽唇音（非、敷、奉、微韻）」と「重唇音（幫、滂、並、明韻）」¹⁸の中国中古音に対して、呉音がすべてハ、バ、マ行音で、漢音はハ、バ行音とハ、バ、マ行音になるといったような音韻対照表を作り、音韻的に呉音・漢音の区別及び中国中古音との対照関係を突き止めようとした。また、その音韻対照表から、例えば：入声音-t の表記において、呉音が「チ」で、漢音では「ツ」になるとの音韻的相違が見られる。呉音・漢音の音韻的特徴の違いをいささかに表二のようにまとめる。

¹⁵ 中国語音韻学において、字音の頭子音を表わす 36 字を指す。三十六字母にはさらに五音（牙音、齒音、舌音、唇音、喉音）と清濁（全清、次清、全濁、次濁）によって分類される。

¹⁶ 高松政雄（1986：190-191）『日本漢字音概論』（風間書房）。

¹⁷ 沼本克明（1991：16-23）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）。

¹⁸ 三十六字母の五音において、唇音（軽唇音、重唇音）の頭子音を表わす 8 字である。

表二 漢字音の音韻的特徴（呉音・漢音）

漢字音の音韻的特徴	呉音	漢音
連濁の有無	よくある ¹⁹	殆どなし
清音と濁音の区別	ある	なし
入声音-tの表記	チ	ツ
軽唇音の表記（非、敷、奉、微韻）	ハ、バ、マ行	ハ、バ行
重唇音の表記（幫、滂、並、明韻）	ハ、バ、マ行	ハ、バ、マ行
軽唇音と重唇音の区別	なし	混同あり

表二について、漢字辞書²⁰や一般の辞書²¹にも見られるように、呉音・漢音の漢字音分類がはっきりしており、定説としてみても良からう。つまり、呉音・漢音の研究はかなり定着しており、漢字音における呉音・漢音の区別と連続関係は大概明らかにされている。

一方、唐宋音において、高松政雄（1986：239-305）は唐宋音を中世の唐音（狭義的宋音）と近世の唐音（狭義的唐音）と分け、時代的にそれを区別しようとした。さらに、沼本克明（1991：14）は宋音と唐音とを厳密に区別していないのが普通であると述べたが、宋音と唐音は中国宋代以後の音を漸次的に移植したもので、それを弁別するために、沼本は鎌倉初期以後に移植されたものを「宋音」、江戸時代初期から江戸後期にかけて移植された者を「唐音」と定義した。

沼本は唐宋音の導入によって、呉音・漢音から唐宋音への音韻変化について、例えば入声音-p, -t, -kの消失が反映されることを論証した²²。さらに唐宋音それぞれの特徴について、例えば宋音に見られない軽唇音 f と重唇音 p の区別について、唐音においては軽唇音 f がハ行、重唇音 p がパ行になる、喉音（曉母）

¹⁹ 呉音の連濁の例を挙げれば：「経済」における「済」（サイ→ザイ）、「根性」における「性」（しょう→じょう）、「変化」における「化」（け→げ）などが見られる。

²⁰ 代表的な漢字辞書として、藤堂明保等編（1993）『漢字源』EPWING版（学習研究社）、白川静（1996）『字通』（平凡社）が挙げられる。

²¹ 例えば：松村明編（2006：特別ページ40-41）「呉漢音対照表」『大辞林』第三版（三省堂）。

²² 沼本克明（1991：273-278、三版）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）。

の表記は唐音においてはほぼハ行、宋音ではカ・ハ行が共存したなどの現象を提出して区別をつけようとした²³。

そして、湯沢質幸（1987：8-9）は唐宋音が日本語に導入した原因を説き、唐宋音の導入は禅宗と伴ってきたもので、宗教的原因もそのひとつであるが、従来の呉音、漢音と比べれば、唐宋音はその斬新さが人々に新鮮な印象を与えることを原因の一つとした。また、新しく伝わってきた文物にその印象を合わせるために、唐宋音を取り入れたわけであると解釈した。つまり、唐宋音は新しい音韻的性質を持っているため、それを取り入れたわけである。

また、岡田袈裟男（2006：549-589）は『江戸異言語接触 蘭語・唐話と近代日本語』では、江戸時代に岡島冠山が編集された『唐話纂要』（1718年）に羅列された二字話の部分を整理し、唐話辞典をまとめた。その辞典において、漢字表記語の唐音を現代北京音と並べ、例えば：「万」を「ワン：wan」、「包」を「パウ：bao」、「害」を「ハイ：hai」のように字音対照表を作り、現代北京音との対照関係を提示しようとした。以上の先行研究を踏まえ、宋音・唐音との音韻的相違を一部抜粋で表三のようにまとめてみる。

表三 漢字音の音韻的特徴（宋音・唐音）

漢字音の音韻的特徴	宋音	唐音
軽唇音の表記（非、敷、奉、微韻）	ハ、バ行	ハ、ワ、ア行
重唇音の表記（幫、滂、並、明韻）	ハ、バ、マ行	バ、パ、マ行
軽唇音と重唇音の区別	混同あり	ある
喉音（曉母）の表記	カ・ハ行	ハ行

したがって、本稿は唐宋音について、音韻的相違を認める立場から、宋音・唐音に分けて討論するべきと考える。しかし、宋音・唐音は呉音・漢音のよう

²³ 沼本克明（1991：274-275、283-284、三版）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）。

に日本語にあまり浸透していない上、字音対応関係が完全でない。例えば、漢字辞書に漢字ごとに呉音、漢音が明記されるのに対して、唐宋音が明記されるのは「行（アン）」「経（キン）」「子（ス）」などごく一部の漢字である。その研究成果は宋音・唐音の全体像を垣間見ることしかできないのが現状である。

以上の研究をまとめると、漢字音システムは時代順に呉音→漢音→宋音→唐音という連続関係がなされ、それぞれに音韻的特徴を持っていることがわかる。表二、表三にあるそれぞれ漢字音の音韻的特徴を対照に、表四のようにまとめてみる。

表四 漢字音の音韻的特徴

漢字音の音韻的特徴	呉音	漢音	宋音	唐音
連濁の有無	よくある	殆どなし	殆どなし	殆どなし
清音と濁音の区別	ある	なし	なし	なし
入声音の有無 (入声音-tの表記)	ある(チ)	ある(ツ)	消滅する	なし
軽唇音の表記 (非、敷、奉、微韻)	ハ、バ、マ行	ハ、バ行	ハ、バ行	ハ、ワ、ア行
重唇音の表記 (幫、滂、並、明韻)	ハ、バ、マ行	ハ、バ、マ行	ハ、バ、マ行	バ、パ、マ行
軽唇音と重唇音 の区別	なし	混同あり	混同あり	ある
喉音(曉母)の表記	カ行	カ行	カ・ハ行	ハ行

表四にまとめられたように、呉音、漢音、宋音、唐音という連続関係がはっきりわかる。例えば、「連濁の有無」、「清音と濁音の区別」は呉音独特の特徴である一方、入声音は呉音・漢音に両方とも存在しているが、宋音・唐音においては消えていった特徴であることがわかる。また、「軽唇音・重唇音の表記」について、呉音は同じく「ハ、バ、マ行」で表記されるが、漢音や宋音に下がると、「マ行」が重唇音の表記のみ使われるようになり、唐音ではそれぞれ「ハ、

ワ、ア行」、「バ、パ、マ行」で表記され、区別するようになった。喉音（曉母）の表記も「カ行」から「カ・ハ行」、「ハ行」という連続的変化が見られる。

したがって、現在の漢字音研究、特に呉音・漢音は以上の先行研究を踏まえて論述するものが多く、呉音・漢音・宋音・唐音のメカニズムと音韻的連続関係が論じられるわけである。しかし、唐音以降に中国から伝来した近現代中国語からの語彙に見られる従来の漢字音に依らない読み方は一括して外来語として扱われるケースが多く、その読み方のメカニズムと従来の漢字音との繋がる関係があまり論じられていない。それを明らかにするには、従来の漢字音に依らない読み方をする麻雀用語を取り上げ、その特徴を解明した上に、従来の漢字音との連続関係を明らかにすることによって、新しい漢字音が成立する可能性を論じる所存である。

つまり、従来の漢字音に依らない読み方をする麻雀用語は一般的に外来語として扱われるが、その読み方は従来の漢字音との特徴を引き継いでいる部分があり、連続関係になるものがあると思われる。したがって、その連続関係とは一体いかなるもので、その読み方の特徴にどのように反映しているかは、これまでの研究成果を踏まえ、麻雀用語を取り上げて検討してみる。

2-3 まとめ

以上の先行研究を見てきたように、まずは麻雀用語について、その漢字表記語には従来の漢字音に依らない読み方が存在している。そして、その読み方は現代北京語に相似しており、従来の漢字音の読み方とも音韻的相違が見られると分かった。しかし、その論述は一部の麻雀用語にとどまり、まだ全般的に示されていないため、さらに補完する必要がある。

したがって、従来の漢字音に依らない読み方をする麻雀用語の漢字表記語がどれほど存在しているかを確認する皮切りに、その読み方及び特徴を明らかにする。そして、その読み方と現代北京語との関係を確定した上に、用語と読み方の関係における特徴を見出す。最後に、麻雀用語における漢字表記語の読み方の成立経緯について、従来の漢字音に依らない読み方と従来の漢字音の読み方に分けて、それぞれが成立した経緯を究明する。

次に、漢字音について、呉音・漢音・宋音・唐音を時代的に分けることができるが、単に時代的に分けるのではなく、一連の漢字音は音韻的連続関係を持っていることが分かった。しかし、近現代中国語からの語彙に見られる従来の漢字音に依らない読み方は従来の漢字音との連続関係があまり議論されておらず、新しい漢字音の成立の可能性を討論する余地が残されている。

つまり、麻雀用語には従来の漢字音に依らない読み方が多く含まれているため、従来の漢字音との連続関係を検証できる材料になる。漢字との字音対応を明らかにするために、それぞれの読み方が対応する漢字を整理して、その関係を確定する。次に、新しい漢字音の成立を裏付けるために、その読み方の音韻的特徴を割り出して、従来の漢字音との連続関係を見出すことを試みる。

第三章、麻雀用語における漢字表記語の読み方の成立

麻雀用語は使い方によって、(一) 麻雀役、(二) 麻雀牌、(三) 一般麻雀用語に分類できる。そのうち、(三) 一般麻雀用語は麻雀の遊び方、打ち方、状況判断などに関するもので、「鳴く、振り込む、流す」などの日常語がよく使われており、個人・地方による使用傾向の温度差も存在している。そのために、一般麻雀用語の語例は本稿のテーマに合わせて、近現代中国語に由来したと思われるもの、すなわち従来の漢字音に依らない読み方を含む漢字表記語の語例だけ列挙する。

語例の採択について、麻雀関連書籍、漫画、オンライン麻雀、インターネット²⁴から採択する一方、ほかに『大百科事典』(1933年)、『大日本百科事典(ジャポニカ)』(1972年)、『ブリタニカ国際大百科事典』(初版1975年、2版1994年)、『日本国語大辞典』(2000年)には現在あまり使われてない麻雀用語の古い読み方が収録されているため、それを参考に(古)と併記する。

以下は麻雀用語を(一) 麻雀役、(二) 麻雀牌、(三) 一般麻雀用語に分け、その漢字表記語の語例と読み方を整理し、それぞれの読み方の特徴を見出して、その読み方の成立経緯を考えてみる。

3-1 麻雀用語の読み方及び特徴

3-1-1 麻雀役

表五は前述した手順に従って、一般的に戦術書・入門書に見られる順で麻雀役における漢字表記語の語例をまとめ、その読み方が従来の漢字音の読み方に

²⁴ 麻雀関連書籍は井出洋介(1997)『平成版 麻雀新報知ルール』報知新聞社、狩野洋一(2008)『3日間でわかる麻雀入門』日本文芸社、漫画は小林立(2010)『咲 -SAKI- ラブじゃん』スクウェア・エニックス、オンライン麻雀はオンライン麻雀ゲーム「天鳳」：<http://tenhou.net/>、インターネットは日本プロ麻雀連盟：<http://ma-jan.or.jp/index.php>、麻雀国語辞典：http://www.geocities.jp/konchan_page/dic.htmなど、詳しくは最後の参考資料に参照。

よるか否かを整理した一覧である。読み方の採択及びその表記原則について、複数の読み方が存在する場合、それをすべて採択して、片仮名で記す。また、従来の漢字音（宋音、唐音はまだ完全に体系的にできていないため、呉音・漢音を基準にする）に依るもの否かという判別の原則について、例えば：「三暗刻」の「三（サン）」、「天和」の「天（テン）」のような曖昧な読み方は一般的に片仮名表記であるため、従来の漢字音に依るものと認めない。一方、「三色同順」の「三（サン）」、「一気通貫」の「貫（カン）」は一般的に平仮名表記であるため、従来の漢字音に依るものと認める。従来の漢字音に依るものは「○」、従来の漢字音に依らない読み方は「×」、両方とも含むものは「△」と分類する。

表五 麻雀役の読み方

No.	語例	読み方	従来の漢字音に依る読み方
1	立直	リーチ	×
2	一発	イッパツ	○
3	門前清自摸和	メンゼンチンツモホー	×
		(古) メンゼンチンツ (一) モーホー	
4	断么九	タンヤオチュー	×
5	平和	ピンフ (一)	×
		(古) ピンホー	
6	一盃口	イーペーコー	×
7	役牌	ヤクハイ	○
8	翻(翻)牌 ²⁵	ファンパイ、ハンパイ	×
9	嶺上開花	リンシャンカイホー	×
10	槍槓	チャンカン	×
11	海底撈月	ハイテイラオユエ、ハイテイツモ	×
12	海底摸月 ²⁶	ハイテイモ (一) ユエ	×
13	河底撈魚	ホーテイラオユイ、ハイテイロン	×

²⁵ (7)「役牌(ヤクハイ)」と同義。

²⁶ (11)「海底撈月(ハイテイラオユエ)」と同義。

14	三色同順	サンショクドウジュン	○
		(古) サンソートンシュン	×
15	一気通貫	イッキツウカン	○
		(古) イーチートンコワン	×
16	混全帯么九	ホンチャンタイヤオチュー	×
17	七対子	チートイツ	×
18	対々和	トイトイホー	×
19	三暗刻	サンアンコー	×
20	混老頭	ホンロウトウ	△
		(古) ホンラオトウ	×
21	三色同刻	サンショクドウコー	△
		(古) サンソートンコー	×
22	三槓子	サンカンツ	×
23	小三元	ショウサンゲン	○
		(古) シャオサンユアン	×
24	双(両)立直	ダブルリーチ	× (+当て字)
25	混一色	ホンイーソー	×
26	純全帯么九	ジュンチャンタイヤオチュー	△
27	二(両)盃口	リャンペーコー	×
28	清一色	チンイーソー	×
29	国士無双	コクシムソウ	○
30	十三么九 ²⁷	シーサンヤオチュー	×
31	四暗刻	スーアンコー	×
32	大三元	ダイサンゲン	○
		(古) ターサンユアン	×
33	字一色	ツーイーソー	×
34	小四喜	ショウスーシー	△
		(古) シャオスーシー	×
35	四喜和 ²⁸	スーシーホー	×
36	緑一色	リユーイーソー	×
37	清老頭	チンロウトウ	△
		(古) チンラオトウ	×

²⁷ (30)「国士無双(コクシムソウ)」と同義。

²⁸ (35)「小四喜(ショースーシー)」と(46)「大四喜(ダイスーシー)」と同義。

38	四槓子	スーカンツ	×
39	九蓮宝燈	チューレンポートウ	△
		(古) チューレンポートン	
		(古) チューレンパオトン	×
40	人和	レンホー	×
		(古) リェンホー	
41	地和	チーホー	×
42	天和	テンホー	×
43	流し満貫	ナガシマンガン	× (+訓読み)
44	国士無双十三面	コクシムソウジュウサンメン	○
45	大四喜	ダイスーシー	△
		(古) タースーシー	×
46	四暗刻単騎	スーアンコータンキ	△

表五にまとめたように、「立直 (リーチ)」、「断么九 (タンヤオチュー)」、「平和 (ピンフ (-))」のようにチェックに「×」を入れたもの、つまり従来の漢字音に依らない語例が一番多いと見取れる。また、「双 (両) 立直 (ダブルリーチ)」、「流し満貫 (ナガシマンガン)」という語例の読み方の組み合わせはそれぞれ「当て字+×」、「訓読み+×」からなっている。次は、「混老頭 (ホンロウトウ)」、「三色同刻 (サンショクドウコー)」のように、チェックに「△」を入れた語彙、つまり用語の一部の読み方は従来の漢字音に依るものであるが、従来の漢字音に依らない読み方も含んだものである。最後には「一発 (イッパツ)」、「一気通貫 (イッキツウカン)」のように、チェックに「○」を入れた完全に従来の漢字音に依る語例が少し見られる。

次に、従来の漢字音に依らない読み方を含む語例を現代北京語と比較して、その相似度を検証する。その方法として、木村哲也 (1994) は「字牌 (ツーパイ)」を「zipai」、「自摸和 (ツモホー)」を「zimouhu」のように、その漢字表記を現代北京語の漢語ピン音で比較してみた。千田俊太郎 (2009) は現代北京語

から借用した語を列挙し、「新漢語」で定義して、それをカテゴリー化しようとした。結果として、一部の読み方、例えば：「和（フ）」、「花（ホー）」、「地（チー）」は現代北京語からなまるや日本漢字音の干渉があったものものの、ほぼ現代北京語と相似しているとの結論であった。

同じように、表五に挙げられた従来の漢字音に依らない読み方を現代北京語の漢語ピン音と比較してみると、ほぼ相似している以外のものをまとめれば、「和（フ：he）」、「花（ホー：hua）」、「前（ゼン：qian）」、「底（テイ：di）」、「地（チー：di）」しか見られない。木村と千田が論証したように、これは現代北京語から訛った形や日本漢字音の干渉があったと思われる読み方である。つまり、従来の漢字音に依らない麻雀役の読み方は現代北京語との相似度が高く、現代北京語に近い読み方とも言えるのであろう。

麻雀役の読み方の組み合わせと語数の比率については、現在一般的な読み方と古い読み方に依拠するものを表六・七のようにまとめてみる。

表六 麻雀役の読み方の組み合わせ

読み方の組み合わせ	語数	比率
従来の漢字音（○）	8	17%
従来の漢字音+現代北京語に近い読み方（△）	9	19.1%
現代北京語に近い読み方（×）	30 ²⁹	63.8%
合計	47	100%

表七 麻雀役の読み方の組み合わせ（古い読み方）

読み方の組み合わせ	語数	比率
従来の漢字音（○）	4	8.5%
従来の漢字音+現代北京語に近い読み方（△）	3	6.3%
現代北京語に近い読み方（×）	40 ³⁰	85.1%
合計	47	100%

²⁹ 「双（両）立直（ダブルリーチ）」、「流し満貫（ナガシマンガン）」2例を加算する。

³⁰ 同上注。

従来の漢字音に依らない、つまり現代北京語に近い読み方をする語彙は全 47 例中 (4 例は異形同義語:「役牌 (ヤクハイ)」=「翻 (翻) 牌 (ファンパイ、ハンパイ)」、「海底撈月 (ハイテイラオユエ)」=「海底摸月 (ハイテイモーユエ)」、「国士無双 (コクシムソー)」=「十三么九 (シーサンヤオチュー)」、「四喜和 (スーシーホー)」=「小四喜 (ショウスーシー)」か「大四喜 (ダイスーシー)」) に 30 例、一部の漢字が現代北京語に近い読み方をする用語は 9 例、従来の漢字音に依る用語が 8 例である。

また、『大百科事典』(1933 年)、『大日本百科事典 (ジャポニカ)』(1972 年)、『ブリタニカ国際大百科事典』(初版 1975 年、2 版 1994 年)、『日本国語大辞典』(2000 年) などに見られる古い読み方を現在一般的に認識されている読み方に置き換えると、現代北京語に近い読み方をする用語 (×) は全 47 例 (4 例は異形同義語) 中に 40 例、一部の漢字が現代北京語に近い読み方をする用語 (△) は 3 例、従来の漢字音に依る用語 (○) が 4 例である。つまり、現代北京語に近い読み方を含む用語は新旧を問わず、全体の八割以上に達していると分かった。これは一番目の特徴と言える。

麻雀役に現代北京語近い読み方をする用語の多さが目立っている一方、現在一般的もしくは古い読み方に依拠することによって、その読み方の組み合わせの語例数が変化していることが見られる。すなわち、本来現代北京語に近いものから、一部の漢字が従来の漢字音もしくは全部従来の漢字音に変化した語彙がある。その変化構造と変化した麻雀役の語例を表八で表す。

表八 麻雀役における現代北京語に近い読み方の変化構造

変化構造	語例	古い読み方	現在一般的な読み方
一部が従来の漢字音に変化	混老頭	ホンラオトウ	ホンロウトウ
	三色同刻	サンソートンコー	サンショクドウコー
	小四喜	シャオスーシー	ショウスーシー
	大四喜	タースーシー	ダイスーシー
	清老頭	チンラオトウ	チンロウトウ
	九蓮宝燈	チューレンパオトン	チューレンポートウ
全部が従来の漢字音に変化	三色同順	サンソートンシュン	サンショクドウジュン
	一気通貫	イーチートンカン	イツキツウカン
	小三元	シャオサンユアン	ショウサンゲン
	大三元	ターサンユアン	ダイサンゲン

つまり、もともと現代北京語に近い読み方をしていた一部の用語が従来の漢字音の読み方に変化したものがある。これは二番目の特徴と言える。

最後に、古い読み方に依拠したことで、最初から現代北京語に近い読み方をしない麻雀役の用語を表九のようにまとめてみる。

表九 最初から現代北京語に近い読み方をしない麻雀役の用語

読み方の構造	語例 (読み方)
当て字+現代北京語に近い読み方	双 (両) 立直 (ダブルリーチ)
訓読み+現代北京語に近い読み方	流し満貫 (ナガシマンガン)
従来の漢字音 + 現代北京語に近い読み方	純全帯么九 (ジュンチャンタイヤオチュー)、四暗刻単騎 (スーアンコータンキ)、純正九蓮宝燈 (ジュンセイチューレンポートウ)
従来の漢字音	一発 (イツパツ)、役牌 (ヤクハイ)、国士無双 (コクシムソー)、国士無双十三面 (コクシムソージュウサンメン)

以上の用語を見ると、「一発」「純 (正)」「流し満貫」「単騎」「双、両 (ダブル)」「十三面」は日本独自のルールによって派生した役の用語で、原型となる

中国麻雀には見られないものである。また、「役牌」「国士無双」という役の定義は中国麻雀にも存在しているが、それぞれの名称は元々「翻牌(ファンパイ)」
「十三么九(シーサンヤオチュー)」である。したがって、麻雀役の古い読み方をたどれば、現代北京語に近い読み方をしない麻雀役の用語は麻雀の原型、即ち中国麻雀と違い、ほとんど日本麻雀のオリジナルルールや新しく創造した名称によって生じられたものであることが分かった。つまり、麻雀は中国発であるが、日本のオリジナルルールに関連する用語において、従来の漢字音に依るものが多いのは三番目の特徴と言える。

つまり、以上の麻雀役の読み方の特徴をまとめると。

- (a) 現代北京語に近い読み方を含む用語が多い。
- (b) 現代北京語に近い読み方をしていた一部の用語が従来の漢字音に依るようになるものがある。
- (c) 日本麻雀のオリジナルルールや新しい名称から誕生した漢字表記語の用語は従来の漢字音に依るものが多い。

3-2-2 麻雀牌

表十は前述した手順に従って、一般的に戦術書・入門書に見られる順で麻雀牌における漢字表記語の語例をまとめ、その読み方が従来の漢字音の読み方によるか否かを整理した一覧である。語例の採択、読み方の採択、古い読み方の記し方及び従来の漢字音に関する判定は原則的に前述した麻雀役の用語と同じものである。

表十 麻雀牌の読み方

No.	語例	読み方	従来の漢字音 に依る読み方
1	花牌	ファパイ、ホーパイ	×
		ハナハイ	○ (+訓読み)
2	風牌	フォンパイ	×
		カゼハイ	○ (+訓読み)
3	三元牌	サンゲンパイ	△
		(古) サンユアンパイ	×
4	万子 ³¹	ワンズ	×
		(古) ワンツ	
		マンズ	△
5	索子	ソーズ	×
		(古) ソーツ、サオツ	
6	筒(餅)子	ピンズ	×
		(古) トンツ	
7	字牌	ツーパイ	×
		ジハイ	○
8	数牌	シューパイ	×
		スウハイ	○
9	么九牌	ヤオチューパイ	×
10	中張牌	チュンチャンパイ	×
11	老頭牌	ロウトウハイ	○
		(古) ラオトウパイ	×
12	東	トン	×
13	南	ナン	×
14	西	シャー	
		(古) シー	×
15	北	ペー	×
16	白	ハク	○
		パイ	×
17	白板 ³²	パイパン	×

³¹ 実際には旧字体の「萬」と表記するが、便宜をはかるため、「万」と記す。

18	発 ³³	ハツ	○
		ファ (一)、ハー	×
19	緑発 ³⁴	リユーファ (一)、リユーハー	×
20	発財 ³⁵	ファ (一) ツァイ	×
21	中	チュウ	○
		チュン	×
22	紅中 ³⁶	ホンチュン、フォンチュン	×
23	一	イー	×
24	二	リャン	×
25	三	サン	×
26	四	スー	×
27	五	ウー	×
28	六	ロー	×
29	七	チー	×
30	八	パー	×
31	九	チュー	×
		キユウ	○

表十にまとめたように、「花牌(ファパイ)」、「風牌(フォンパイ)」、「字牌(ツ
ーパイ)」のようにチェックに「×」を入れたもの、つまり従来の漢字音に依
らない語例が一番多いと見取れる。しかし、花牌を「ハナハイ」、風牌を「カゼ
ハイ」として読むことも可能で、従来の漢字音のみでなく、訓読みが混じって
いる読み方も存在している。ほかに「白、発、中」(パイ、ファ、チュン)を従
来の漢字音で読むケースも多く見られる。やや不自然であるが、「東、南、西、
北」(トン、ナン、シャー、ペー)や数字「一、二」(イー、リャン)をそれぞ
れ「ヒガシ、ミナミ、ニシ、キタ」、「イチ、ニ」で読む場合もあるが、正式な
呼称として認めるケースが少ないため、採択から除外した。

³² (16)「白(パイ・ハク)」の正式呼称である。

³³ 実際には旧字体の「發」と表記するが、便宜をはかるため、「発」と記す。以下同。

³⁴ (18)「発(ファ・ハツ)」の正式呼称である。

³⁵ (18)「発(ファ・ハツ)」の正式呼称である。

³⁶ (20)「中(チュン、チュウ)」の正式呼称である。

次に、表十に列挙した従来の漢字音に依らない読み方を含む語例を現代北京語と比較して、その相似度を検証する。方法としては麻雀役で説明したものと同一のため、ここで説明を省く。結果として、木村哲也(1994)と千田俊太郎(2009)によると、一部の読み方、例えば：「中(チュン)」、「西(シャー)」、「六(ロー)」は現代北京語から訛ったや日本漢字音の干渉があったものの、ほぼ現代北京語と相似しているとの結論であった。

同じように、表十に挙げられた従来の漢字音に依らない読み方を現代北京語の漢語ピン音と比較して、ほぼ相似している以外のものをまとめれば、「花(ホー：hua)」、「中(チュン：chong)」、「西(シャー：shi)」、「発(ハー：fa)」、「六(ロー：liu)」しか見られない。これもまた現代北京語から訛った形や日本漢字音の干渉があったと思われるものである。つまり、麻雀役と同じように、従来の漢字音に依らない麻雀牌の読み方は現代北京語との相似度が高く、現代北京語に近い読み方とも言えるのであろう。

麻雀牌の読み方の組み合わせと語数の比率については、現在一般的な読み方に依拠する場合、複数の読み方が存在しているため、現代北京語に近い読み方を採択する優先度によって、表十一・十二に分けてまとめてみる。また、古い読み方に依拠するものを表十三にまとめてみる。

表十一 麻雀牌の読み方の組み合わせ(一)

読み方の組み合わせ	語数	比率
従来の漢字音(○)	1	3.2%
従来の漢字音+現代北京語に近い読み方(△)	1	3.2%
現代北京語に近い読み方(×)	29	93.5%
合計	31	100%

注：現代北京語に近い読み方を優先に採択した結果である。

表十二 麻雀牌の読み方の組み合わせ（二）

読み方の組み合わせ	語数	比率
従来の漢字音（○）	9	29%
従来の漢字音＋現代北京語に近い読み方（△）	2	6.5%
現代北京語に近い読み方（×）	20	64.5%
合計	31	100%

注：現代北京語に近い読み方ではないものを優先に採択した結果である。

表十三 麻雀牌の読み方の組み合わせ（古い読み方）

読み方の組み合わせ	語数	比率
従来の漢字音（○）	0	0%
従来の漢字音＋現代北京語に近い読み方（△）	0	0%
現代北京語に近い読み方（×）	31	100%
合計	31	100%

従来の漢字音に依らない、つまり現代北京語に近い読み方をする用語は全 31 例中に 29 例になるが、29 例に 9 例は従来の漢字音もしくは訓読みに依る複数の読み方を持ち合わせている。また、『大百科事典』（1933 年）、『大日本百科事典（ジャポニカ）』（1972 年）、『ブリタニカ国際大百科事典』（初版 1975 年、2 版 1994 年）、『日本国語大辞典』（2000 年）などに見られる古い読み方では、現代北京語に近い読み方で表記することがほとんどである。つまり、麻雀牌の用語は麻雀役と同じく、現代北京語に近い読み方を含む用語は全体の九割以上に達している。

しかし、麻雀牌に現代北京語に近い読み方をする用語の多さが目立っている一方、前述した麻雀役の読み方に見られる変化現象と同じように、現代北京語に近い読み方から従来の漢字音に変化した用語がある。その変化構造と変化した麻雀牌の語例を表十四のようにまとめてみる。

表十四 麻雀牌における現代北京語に近い読み方の変化構造

変化構造	語例	古い読み方	現在一般的な読み方
一部が従来の漢字音に変化	万子	ワンツ	ワンズ、マンズ
	三元牌	サンユアンパイ	サンゲンパイ
全部が従来の漢字音に変化	字牌	ツーパイ	ツーパイ、ジハイ
	数牌	シューパイ	シューパイ、スウハイ
	老頭牌	ラオトウパイ	ロウトウハイ
	白	パイ	パイ、ハク
	発	ファ (一)、ハー	ファ (一)、ハー、ハツ
	中	チュン	チュン、チュウ
九	チュー	チュー、キユウ	

つまり、もともと現代北京語に近い読み方をする一部の用語が従来の漢字音の読み方に変化したのは二番目の特徴と言える。麻雀役と少し違って、三元牌と老頭牌を除いて、従来の漢字音の読み方に変化した用語はまだ現代北京語に近い読み方を持ち合わせており、複数の読み方を持つようになった。

また、表十三で示したように、古い読み方に依拠する場合、すべての麻雀牌の語例は最初から現代北京語に近い読み方していたことが分かった。つまり、麻雀牌には麻雀役のような日本麻雀のオリジナルルールや新しく創造した名称によって生じられた漢字表記語がないのが三番目の特徴と言える。

つまり、以上の麻雀牌の読み方の特徴をまとめると。

- (a) 現代北京語に近い読み方を含む用語が多い。
- (b) 現代北京語に近い読み方をする用語に従来の漢字音が介在して、複数の読み方を持つようになったものがある。
- (c) 日本麻雀のオリジナルルールや新しい名称から誕生した漢字表記語の用語は見当たらない。

3-1-3 一般麻雀用語

表十五は前述した手順に従って、五十音順で麻雀役における漢字表記語の語例をまとめ、その読み方が従来の漢字音の読み方によるか否かを整理した一覧である。語例の採択、用語の読み方の採択や古い読み方の記し方及び従来の漢字音に関する判定は原則的に前述した麻雀役、麻雀牌の用語と同じものである。ただし、一般麻雀用語については、本章の冒頭でことわったように、その範囲を定めることが困難なため、本稿のテーマに合わせて、近現代中国語に由来したと思われるもの、すなわち従来の漢字音に依らない読み方を含む語例だけ列挙する。

また、数字の組み合わせ・略語・派生語、例えば：「二翻（リャン＋ファン）」、「三索（サン＋ソー）」、「混一色」の略語：「混一（ホンイツ）」、「暗刻」から派生した「暗刻（アンコー）場」、「辺張」から派生した「辺張（ペンチャン）待ち」などの用語は原則的に対象外として扱う。

表十五 一般麻雀用語の読み方

No.	語例	読み方	従来の漢字音に依る読み方
1	暗槓	アンカン	×
2	暗刻	アンコー	×
3	安牌	アンパイ	×
4	一向聴	イーシャンテン	×
5	一荘	イーチャン	×
6	一幢	イートン	×
7	一般高	イーパンカオ	×
8	葉子戯	イエツシー	×
9	開門	カイメン	×
10	上家	カミチャ	×（+訓読み）
		（古）シャンチャ	×

11	槓 (子)	カン (ツ)	×
12	槓材	カンザイ	△
13	嵌塔	カンター	×
14	嵌張	カンチャン	×
15	骨牌	クーパイ	×
16	刻子	コーツ	×
17	客風牌	コーフォンパイ	×
18	控花	コンホワ	×
19	賽子	サイツ	×
20	散家	サンチャ	×
21	三家和	サンチャホー	×
		トリプルロン	当て字
22	三面張	サンメンチャン	×
23	十三不塔	シーサンプーター	×
		シーサンプートー	△
24	十三無靠	シーサンウーシー	×
25	十三龍門	シーサンロンメン	×
26	洗牌	シーパイ	×
27	下家	シモチャ	× (+訓読み)
		(古) シャ (一) チャ	×
28	骰子	シャイツ	×
29	少牌	シャオパイ	×
		ショウハイ	○
30	雀士	ジャンシ	△
31	雀莊	ジャンソウ	△
32	雀頭	ジャントウ	×
33	双碰	シャンポン	×
34	順子	シュンツ	×
35	小明槓	ショウミンカン	△
36	熟牌	ショーパイ	×
37	生牌	ションパイ	×
38	四開槓	スーカイカン	×
39	四槓散 (算) 了	スーカンサンラ	×
40	四風子連打	スーフォンツレンタ (一)	×

41	塔子	ターツ	×
42	打天九	ターテンチュー	×
43	多牌	ターパイ	×
		タハイ	○
44	打牌	ターパイ	×
		ダハイ	○
45	多面張	ターメンチャン	×
46	大明槓	ダイミンカン	△
47	倒牌	タオパイ	×
		トウハイ	○
48	単吊	タンチャオ	×
49	単張	タンチャン	×
50	吃	チー	×
51	七星無靠	チーシンウーシー	×
52	起家	チーチャ	×
53	起莊	チーチャン	×
54	紙牌	チーパイ	×
55	砌牌	チーパイ	×
56	尖張牌	チェンチャンパイ	×
57	見和即和	チェンホーチーホー	×
58	加槓	チャカン	×
		カカン	△
59	莊家	チャンチャ	×
		(古) チョワンチャ	
60	莊風牌	チャンフォンパイ	×
		(古) チョワンフォンパイ	
61	圈風牌	チャンフォンパイ	×
		(古) チュアンフォンパイ	
62	九種么九	チューチョンヤオチュウ	×
63	籌馬	チョーマ	×
64	錯和 (沖和)	チョンボ	×
65	井圈	チンチャン (チェン)	×
		(古) チンチュアン	
66	錯行為	ツオコウイ	△

67	聴牌	テンパイ	×
68	対家	トイチャ	×
69	推牌九	トイパイチュー	×
70	対面	トイメン	×
71	同棋	トンチー	×
72	不聴	ノーテン	× (+当て字)
73	牌卓	パイチュオ	×
74	配牌	ハイパイ	△
75	包	パオ	×
76	好牌先打	ハオパイシェン (セン) ター	×
77	半荘	ハンチャン	△
78	壁牌	ピーパイ	×
79	副底	フーテイ	×
80	副露	フーロ	×
81	浮屍牌	フースーパイ	×
82	辺塔	ペンター	×
83	辺張	ペンチャン	×
84	放銃	ホーチャン	△
		ホウジュウ	○
85	和了	ホーラ	×
86	碰	ポン	×
87	碰材	ポンザイ	△
88	麻雀	マージャン	×
		(古) マーチャン	
89	馬吊	マーチャオ	×
90	馬将 (麻将)	マーチャン	×
91	満貫 (款)	マンガン	×
		(古) マンカン、マンコワン	
92	明刻	ミンコー	×
93	面子	メンツ	×
94	門風牌	メンフォンパイ	×
95	摸打	モータ (一)	×
96	摸牌	モーパイ	×
97	理牌	リーパイ	×

98	両嵌	リャンカン	×
99	二(両)家和	リャンチャホー	×
		ダブロン	当て字
10	両面	リャンメン	×
101	零牌	リンパイ	×
102	輪荘	ロンチャン	×
		リンチャン	△
103	連荘	レンチャン	×
		(古) レンチョワン	
104	連風牌	レンフォンパイ	×
105	栄和	ロンホー	×
106	王牌	ワンパイ	×
107	牙牌	ヤーパイ	×
108	遊湖	ユーホ	×

表十五にまとめたように、用語の選別は従来の漢字音に依らない読み方を含む基本用語のみに限定したため、例えば：「一荘（イーチャン）」、「嵌張（カンチャン）」、「散家（サンチャ）」などチェックに「×」を入れたものがほとんどである。しかし、麻雀役や麻雀牌にも見られるように、訓読みや従来の漢字音が混ざっている語例も散見している。

次に、表十五に列挙した従来の漢字音に依らない読み方を含む語例を現代北京語と比較して、その相似度を検証する。方法としては麻雀役で説明したものと同一のため、ここで説明を省く。結果として、木村哲也（1994）と千田俊太郎（2009）によると、一部の読み方は現代北京語と少なまるところや日本漢字音の干渉があったものの、ほぼ現代北京語と相似しているとの結論であった。

同じように、表十五に挙げられた従来の漢字音に依らない読み方を現代北京語の漢語ピン音と比較して、ほぼ相似している以外のものをまとめれば、「幢（トン：chuang）」、「吊（チャオ：diao）」、「靠（シー：kao）」、「銃（チャン：chong）」、

「雀（ジャン：que）」が現代北京語とやや離れていることを例外と看做して、ほかに「底（テー：di）」、「多（ター：duo）」、「和（フ（一）：ho）」、「湖（ホ：hu）」、「聽（テン：ting）」の例が見られる。例外を除けば、現代北京語から訛った形や日本漢字音の干渉があったと思われるものである。つまり、一般麻雀用語に例外（第四章でまた解釈する）は見られるものの、従来の漢字音に依らない麻雀役の読み方は概ね現代北京語との相似度が高く、現代北京語に近い読み方とも言ってもさしつかえないのであろう。

最初に述べたように、「鳴く、振り込む、流す」などの日常語は麻雀にもよく使われており、個人・地方による使用傾向の温度差が存在しているため、一般麻雀用語に現代北京語に近い読み方が占める割合を統計できない。しかし、表十五に列挙した用語を覚えれば、大抵の局面を賄える。つまり、麻雀役と麻雀牌の特徴、現代北京語に近い読み方を含む用語が多いと共通していると言える。

最後に、古い読み方に依拠したことで、最初から現代北京語に近い読み方をしない一般麻雀用語を表十六のようにまとめてみる。

表十六 最初から現代北京語に近い読み方をしない一般麻雀用語

読み方の組み合わせ	語例（読み方）
当て字＋現代北京語に近い読み方	不聽（ノーテン）
従来の漢字音 ＋ 現代北京語に近い読み方	槓材（カンザイ）、雀士（ジャンシ）、雀莊（ジャンソウ）、小明槓（ショウミンカン）、大明槓（ダイミンカン）、錯行為（ツオコウイ）、配牌（ハイパイ）、半莊（ハンチャン）、碰材（ポンザイ）、放銃（ホーチャン）

表十五には従来の漢字音に依らない読み方を含む用語のみ整理したため、表には列挙できなかったが、例えば：「青天井（アオテンジョウ）」、「空行為（クウコウイ）」、「基本符（キホンフ）」、「供託（キョウタク）」、「下駄牌（ゲタハイ）」、

「現物（ゲンブツ）」、「高点法（コウテンホー）」などの語例も最初から従来の漢字音に依る漢字表記語が挙げられる。また、表十六に挙げられた「小明槓（シヨウミンカン）」、「大明槓（ダイミンカン）」³⁷、「放銃（ホーチャン）」以外に、「槓材（カンザイ）」、「雀士（ジャンシ）」、「雀荘（ジャンソウ）」、「錯行為（ツオコウイ）」、「配牌（ハイパイ）」、「半荘（ハンチャン）」、「碰材（ポンザイ）」を加え、原型となる中国麻雀には存在しなかった。つまり、麻雀役の特徴、日本独自のルールから誕生した漢字表記語は、従来の漢字音に依るのが多いと共通していると言える。

一般麻雀用語には現代北京語に近い読み方をする用語が多いが、従来の漢字音に依る読み方を持ち合わせている用語、例えば：「少牌（シャオパイ、シヨウハイ）」、「多牌（ターパイ、タハイ）」、「輪荘（ロンチャン、リンチャン）」などもある。しかし、これらの用語は言い換えの用語がより目に触れると言える。その用語の言い換えを表十七のようにまとめてみる。

表十七 一般麻雀用語の言い換え

語例	読み方	言い換え
安牌	アンパイ	安全牌（あんぜんはい、あんぜんパイ）
開門	カイメン	割れ目
客風牌	コーフォンパイ	オタ風（かぜ）
賽子	サイツ	サイコロ
散家	サンチャ	子（こ）
洗牌	シーパイ	牌をかき混ぜる
骰子	シャイツ	サイコロ
少牌	シャオパイ、シヨウハイ	牌が足りない
熟牌	ショーパイ	場に出ている牌

³⁷ 「小明槓（シヨウミンカン）」、「大明槓（ダイミンカン）」は最初から「大明槓（ターミンカン）」、「小明槓（シャオミンカン）」であった可能性を、麻雀役「大四喜（タースーシー → ダイスーシー）」、「小四喜（シャオスーシー → ショウスーシー）」から類推できるため、例外として見るかは曖昧である。

多面張	ターメンチャン	多面待ち
打牌	ターパイ、ダハイ	牌を打つ
多牌	ターパイ、タハイ	牌があまる
倒牌	タオパイ、トウハイ	牌を倒す
単吊	タンチャオ	単騎
起家	チーチャ	立ち親
起荘	チーチャン	立ち親
砌牌	チーパイ	牌を積む
荘家	チャンチャ	親 (おや)
九種么九	チューチョンヤオチュウ	九種九牌 (きゅうしゅきゅうはい)
包	パオ	責任払い
和了	ホーラ	アがる
摸牌	モーパイ	自摸 (ツモ) る
理牌	リーパイ	手牌 (てはい) を整理する
輪荘	ロンチャン、リンチャン	親が流れる
連風牌	レンフォンパイ	ダブ東、ダブ南

以上にまとめたように、一部の一般麻雀用語は専門用語の色が薄い一般語に言い換えられる。これは麻雀役や麻雀牌の用語に見られない現象である。

つまり、以上の一般麻雀用語の読み方の特徴を解明すると。

- (a) 現代北京語に近い読み方を含む用語が多い。
- (b) 日本麻雀のオリジナルルールや新しい名称から誕生した漢字表記語の用語は従来の漢字音に依るものが多い。
- (c) 現代北京語に近い読み方から従来の漢字音に変化した用語はあるが、むしろ専門用語の色が濃い用語を一般語に言い換えられるものが多い。

3-1-4 麻雀用語の特徴比較

麻雀役、麻雀牌、一般麻雀用語（従来の漢字音に依らない読み方を含む用語のみ）を分析した上に、それぞれの特徴をいくつか明らかにした。以下では麻

雀用語の読み方の特徴を取り上げ、表十八で比較してみる。

表十八 麻雀用語の読み方の特徴比較

特徴	麻雀役	麻雀牌	一般麻雀用語
(a) 現代北京語に近い読み方を含む用語が多い	○	○	○
(b) 現代北京語に近い読み方から従来の漢字音に変化した用語がある	○	○	○
(c) 日本麻雀によるオリジナルから誕生したものは、従来の漢字音に依るものが多い	○	×	○
(d) 一般語に言い換えられる用語が多い	×	×	○

麻雀用語の漢字表記語は全体的に従来の漢字音に依らない読み方が多用され、それもほぼ現代北京語に近い読み方である。また、現代北京語に近い読み方から従来の漢字音に依るようになった用語があるという特徴も共通している。しかし、日本麻雀によるオリジナルから誕生したものは、従来の漢字音に依るものが多いという特徴は麻雀牌に見られない。また、一般語に言い換えられる用語が多いという特徴もまた麻雀役、麻雀牌に見られない。つまり、麻雀役、麻雀牌、一般麻雀用語の特徴は共通している部分はあるが、違う部分もある。

(a) について、従来の漢字音に依る選択肢もあったにもかかわらず、多くの用語が現代北京語に近い読み方を選択した原因が未だ解明されていない。(b) について、麻雀用語における読み方の変化方向は「現代北京語に近い読み方から従来の漢字音」と示唆している。(c) について、用語の語源は読み方の選択によって弁別できるものを示唆している。(d) について、麻雀役、麻雀牌に一般用語の同義・類義語が少なく、麻雀用語においての非可換性を示唆している。

3-2 麻雀用語における漢字表記語の読み方の成立経緯

木村哲也（1994：55）は、麻雀用語は「実に日中混合読みをしている」と述べている一方、千田俊太郎（2009：20）は「麻雀ジャーゴンの中核たるルール体系に関する語彙の多くが新漢語で占められ、麻雀ジャーゴンを特徴づける要素の一つとして重要である」と述べている。前節で麻雀用語における漢字表記語の読み方の特徴を分析したように、現代北京語に近い読み方が多用されているが、従来の漢字音に依るものもあることと合致している。

しかし、麻雀用語はその読み方に均一性を保たずに、現代北京語に近い読み方と従来の漢字音に依るものに両分した原因はまだ解明されていない。この節では、前掲した麻雀用語（麻雀役、麻雀牌、一般麻雀用語）の読み方の特徴に沿い、麻雀用語における漢字表記語の読み方の成立経緯に仮説を立てる。

3-2-1 現代北京語に近い読み方を取る場合

前掲した麻雀用語（麻雀役、麻雀牌、一般麻雀用語）の読み方の特徴を見れば、現代北京語に近い読み方を含む用語が多いと見受けられる。麻雀は中国発であるため、当然と思えば当然であるが、これらの用語は漢字表記が使われているため、なぜ従来の漢字音に依らず、その多くが現代北京語に近い読み方を選択したのかはまだ疑問が残っている。この問題について、前節に麻雀用語の特徴をまとめた結果に沿いながら、音韻的・意味的・出自的な面から多くの麻雀用語が従来の漢字音に依らない原因を探る。

(a) 音韻的理由

まず、音韻的に捉えれば、新鮮な印象を与えるのが一つの原因として考えられる。今の漢字音システムの成立を顧みれば、今の漢字音システム（呉音、漢

音、宋音、唐音)は同時代に伝来したわけではなく、新しい時代に伝来した語彙と共に、違う読み方を持たせたわけである。また、その違う読み方というのは、当時の中国語の音韻を反映したもので、その時代の新しい読み方でもある。

麻雀用語の特徴「現代北京語に近い読み方を含む用語が多い」というのは、中国語＝現代北京語に近い読み方を取っていることは自明の理であるが、その読み方は前述の千田俊太郎(2009:20-26)の分析したように、「音韻的には漢語と似るが異なる振る舞ひも示す」と従来の漢字音とは似たり違ったりするような読み方をしていることを説明した。

その検証として、実際に麻雀用語に使われている現代北京語に近い読み方を従来の漢字音(前述したように、宋音、唐音はまだ完全に体系的にできていないため、呉音・漢音を基準にする)と対照して分析する。以下では麻雀用語の読み方(表五、表十、表十五)に見られた現代北京語に近い読み方と従来の漢字音との音韻的特徴の差異の例をまとめてみる。

表十九 従来の漢字音にない音韻的特徴

音韻的特徴	読み方
従来の漢字音にない語頭から始まる読み方	チェン、パー、パイ、パオ、パン、ピー、ピン、プー、ペー、ペン、ポン、ファー、ファン、フォン
従来の漢字音に見られない音結合 ³⁸	イー、イエ、ウー、カオ、コワン、シー、シャー、シャイ、シャオ、シャン、ジャン、ジョン、ター、タオ、チー、チャオ、チャン、チュオ、チュン、チョワン、チョン、トイ、ハー、ハオ、ホワ、マー、ヤオ、ユアン、ユエ、ラオ、リー、リャン

表十九を見る限り、麻雀用語に見られる現代北京語に近い読み方は従来の漢字音と音韻的に比べれば、主に二つの差異が見つかる。

³⁸ 例えば、現代仮名遣いでは、個別漢字音の音結合において、「ショ」は「ウ、ク」、「ハ」は「イ、ク、チ、ツ、ン」としか結合しない。

- (1) 従来の漢字音にない語頭から始まる読み方、「チェ」、「パ行音」と「フ
ァ行音（ファ、フォ）」が語頭に現れるものがそれに当たる。
- (2) 従来の漢字音に見られない音結合、つまり、「向（シャン）」や「対（ト
イ）」のような字音対応の組み合わせは従来の漢字音と同じく、字音対
応関係はあるが、従来の漢字音にない組み合わせでできている。

つまり、麻雀用語に見る現代北京語に近い読み方は従来の漢字音と同じく、
字音対応の原則に従っている一方、従来の漢字音にないものが多いため、聞こ
えは新しく感じられると考えられる。ましてや麻雀用語において、漢字一字で
もかなり違ってくるわけで、漢字二字語や三字語なら、その響きはさらに新し
く感じられよう。先行研究で紹介した湯沢質幸（1987：8-9）が当初従来の漢字
音が存在しているのにもかかわらず、唐宋音を取り入れた理由をその斬新さが
人々に新鮮な印象を与えるや新しく伝わってきた文物にその印象を合わせるよ
うに解釈したようにと呼応する。麻雀というゲームは大正時代以降から流行る
ようになったわけで、音韻的に現代北京語の真似を兼ねて、異国趣味（エキゾ
チシズム）に相応しい新しい音の響きが自然に受け止められると思われる。

(b) 意味的理由

次に、意味的に捉えれば、麻雀用語における漢字表記、例えば「雀」「平」
「清」「混」「対」「和」「子」などは従来の漢字の意味とは食い違って、新しい
意味を表していることがわかる。その例を表二十のようにまとめてみる。

表二十 麻雀用語の漢字表記と一般用語の漢字表記の意味の違い

漢字表記	従来の漢字音に依る読み方	現代北京語に近い読み方
雀	読み方：ジャク	読み方：ジャン
	意味：すずめ	意味：麻雀そのもの
	語例：燕雀、雀躍、雀羅、朱雀	語例：麻雀、雀荘、雀士、雀鬼

平	読み方：ヘイ、ビョウ	読み方：ピン
	意味：平たい、偏らない、普通、平らげる、穏やか	意味：符がない
	語例：平坦、平原、公平、平均、平常、平定、平和	語例：平和、門断平（麻雀役の門前清+断么九+平和の略語）
清	読み方：セイ、ショウ	読み方：チン
	意味：清い、さっぱりして気分がよい、綺麗にする	意味：同じ属性の数牌揃う役に関連、副露がない
	語例：清酒、清流、清涼、清算	語例：清一色、清老頭、門前清
混	読み方：コン	読み方：ホン
	意味：まじる、濁っている	意味：同じ属性の数牌+字牌が揃う役に関連
	語例：混合、混冥、混沌	語例：混一色、混老頭
対	読み方：タイ	読み方：トイ
	意味：向いあう、比較、応える	意味：牌が二つ、向こう
	語例：対抗、対比、対等、対応	語例：対子、対面、対家
和	読み方：ワ	読み方：ホー、フ（一）
	意味：穏やか、仲良くする、合わせる、数値	意味：アがる
	語例：温和・和解・調和・総和	語例：和了・対々和・二家和
子	読み方：シ	読み方：ツ（一）
	意味：こども、男子の敬称、たね、小さな物利息	意味：牌そのものを指す（接尾辞）
	語例：実子・君子・原子・利子	語例：対子、塔子、面子

ほかに「包」「吃」「幢」「吊」「断」「翻」「槓」「嵌」「刻」「家」「尖」「刻」「了」「栄」「門」「摸」「牌」「立」「洗」「塔」「聴」³⁹など、いちいちその比較内容をここで枚挙するいとまはないが、その漢字表記は一般用語もしくは麻雀用語として使われることによって、読み方も違って来るケースが多いわけである。

また、二字以上の漢字表記語では、例えば：「立直」、「自摸」、「暗刻」、「中張

³⁹ 『広辞苑』、『漢字源』、『大辞泉』をもとに作成した。ほかの漢字表記の意味の違いについては付表の付表一に参照。

牌]、「一向聴」、「嶺上開花」など、従来に読み取れる漢字の組み合わせた意味とは食い違って、新しい意味を表していることがわかる。その例を次のようにまとめてみる。

表二十一 麻雀用語を一般用語からの意味推量する例

語例	一般用語からの意味推量 ⁴⁰	麻雀用語の意味
立直	立ち直ること	門前清で聴牌を宣言すること
自摸	自分で摸索すること	自分の番でアガること
暗刻	暗い時間	手牌三枚同じ牌があること
中張牌	内部を張る札のようなもの	字牌、么九牌以外の数牌
一向聴	ひたすらに聞くこと	あと一枚で聴牌する状態
嶺上開花	嶺の上で花が咲くこと	嶺上牌をツモってアガること

麻雀用語を一般用語の意味から推量すれば、麻雀用語の意味と通じ合えないケースが多い。ほかには多くの現代北京語に近い読み方をする麻雀用語ではこのような意味違いがあり、一字単位の麻雀用語の漢字表記と同じように、その漢字表記は一般用語もしくは麻雀用語として使われることによって、その読み方が違ってくることが明らかである。

したがって、例えば、同じ麻雀用語において、同じ「荘」の漢字表記が使われても、「雀荘」では「ソウ」という漢音の読み方をするが、「連荘」では「チャン」という現代北京語に近い読み方をする。その差異を決めたのは、「雀荘」の「荘（ソウ）」は一般用語の「店」⁴¹という意味を表しているもの、「連荘」の「荘（チャン）」は麻雀用語の「ゲーム」という意味を表しているため、違う意味に違う読み方をするようになったわけである。

⁴⁰ 一般用語においてはもともとこういう語が存在しない。「一般用語の意味推量」というのは麻雀用語を知らない立場で漢字表記から推量すれば、どのような意味になるのであろうかということの意味している。

⁴¹ 例えば、「銭荘（せんそう）」が一例である。また、「荘（そう、しょう）」は二通りの読み方があり、普段は漢音「そう」のほうがよく使われるが、「荘園」に関係しているものは呉音「しょう」がよく使われる。これも一種の読み方による意味的区別と考えられよう。

以上に挙げたように、多くの麻雀用語の漢字表記は、麻雀用語の意味でしか使わないものが多いため、用語そのものが従来の漢字音に依ろうとも意味的に区別がつかない。先行研究で紹介したように、金子尚一（1999：151）は「麻雀」の漢字表記及び「雀」という単語が「マーじゃん」のイメージが固定されている理論、筆者が呼ぶ「漢字のイメージ定着化現象」のように、「麻雀」以外の麻雀用語に見られる現代北京語に近い読み方をする漢字表記はそれぞれのイメージと意味を持っているケースが多い。つまり、麻雀用語において、現代北京語に近い読み方をする用語が多く見られるのは、意味的に一般用語との区別がつかなく効果に影響されていると言える。

(c) 出自的理由

日本語における外来語は16世紀から、つまり西洋文化が日本に伝わってきたとともにその勢力を広げている。漢語は広義では外来語にもなるわけであるが、その伝来した歴史が長いことから、特別扱いとされている。それに基づき、日本語における語彙の語種が和語（固有語）・漢語・外来語（非固有語）とに分けるのが一般的である。しかし、漢語は現在の定義では近代以前中国から伝わってきた語彙に限るケースが多い⁴²。それを制限した理由はともあれ、近代以降（明治以降）中国から伝わってきた語彙は一括して外来語として扱われるようになったのが現状である⁴³。

麻雀用語の語源について、麻雀用語の特徴「日本独自のルールから誕生したものは、従来の漢字音に依るものが多い」と検証したように、日本独自のルールによって創造したもの、例えば：「一発」、「役牌」、「国士無双」などの用語を除いて、ほとんど現代北京語に近い読み方であった。麻雀というゲームは明治

⁴² 杉本雅子（2001：78）「漢語・外来語」『日本語の歴史』（おうふう）。「奈良時代以前から近世までに借入した中国語は「漢語」と呼ばれ、長期にわたって日本語に受け入れられてきた。」

⁴³ 前掲注4、5を参照。

末期に中国から日本に伝わってきたもので、その用語は漢字表記が使われているが、読み方は現代北京語に近いものであったことから、漢語としてではなく、中国からの外来語として扱われる。

麻雀用語は漢字表記が使われているため、例えば：「嶺上開花（リンシャンカイホー）」、「中張牌（チュンチャンパイ）」、「一向聴（イーシャンテン）」などを従来の漢語読みでそれぞれ「リンジョウカイカ」、「チュウチョウハイ」、「イツコウチョウ」と読んではあながち間違いとは言えないが、音韻的理由及び意味的理由がなくなる。つまり、麻雀というゲームで感じる異国趣味が薄くなり、意味的に区別がつかなくなるだけでなく、近現代中国語に由来したという語源の出自を指示する機能もなくなってしまう。

したがって、語源は近現代中国語にあったことを指示するように、漢字表記にかまわず、大部分の麻雀用語に現代北京語に近い読み方が保たれることは妥当である。もともと、外国から輸入した語彙をそのまま現地読みという外来語の表音主義の考えにより⁴⁴、近現代中国語に由来した麻雀用語が現代北京語に近い読み方を選択した形になっているわけと言える。

以上をまとめてみると、漢字表記に合わせて、従来の漢字音に依る選択肢はあったが、多くの麻雀用語が近代北京語に近い読み方を取った理由、すなわち従来の漢字音に依らない原因は以下のように考えられる。

- (a) 音韻的に新鮮な印象を与えられるためである。
- (b) 意味的に新しい意味を表わせるためである。
- (c) 出自的に近現代中国語からの語彙として弁別できるためである。

と大体説明がつく。

⁴⁴ 石綿敏雄（1985：146）『日本語のなかの外国語』岩波書店

一方、複数の読み方を持ち合わせるようになったものを含めて、元々近代北京語に近い読み方から従来の漢字音に依るようになった一部の用語がある。その読み方が成り立った原因を次節で分析してみる。

3-2-2 従来の漢字音に依る場合

前節では多くの麻雀用語が従来の漢字音に依らない原因を検証したように、「一発」、「役牌」、「国士無双」など日本独自のルールから誕生した用語を除いて、音韻的・意味的・出自的な面から考えれば、現代北京語に近い読み方をするのは妥当であると述べた。

しかし、この原則に反して、麻雀用語の特徴「現代北京語に近い読み方から従来の漢字音に変化した用語がある」と見られるように、一部の用語は元々現代北京語に近い読み方を取っていたにも関わらず、漢字表記に合わせて、従来の漢字音に変化した用語があるという疑問が残っている。この問題について、麻雀用語の特徴をまとめた結果に沿いながら、書記的・意味的・表現的理由からその原因を探る。

(a) 書記的理由

麻雀用語には、「沖和（チョンボ）」、「連荘（レンチャン）」、「対面（トイメン）」、「聴牌（テンパ）る」など、日常語に滲んでいる一部の用語がある。しかし、千田俊太郎（2009：19）がすでに指摘しているように、麻雀用語は元々専門用語・隠語（ジャーゴン）のような性質を持ち合わせているため、「入門書、戦術書の類には多くの用語が登場し、付録として用語集をまとめたものもある」が、専門的に「出版物には見るべき麻雀語彙集はなささうである」、むしろ「ウェブ上で語彙・慣用句をまとめた力作は存在する」と述べている。

言うまでもないが、麻雀用語を理解することは麻雀をやるに不可欠である。その手段は大体麻雀の入門書、戦術書を読んで覚えるものである。しかし、麻雀用語は漢字表記が使われているにもかかわらず、現代北京語に近い読み方が多用され、または従来の漢字音に混じった現代北京語に近い読み方もしくは複数の読み方を持つ語例もある。次に、麻雀用語における現代北京語に近い読み方以外の組み合わせの例を表二十二のようにまとめてみる。

表二十二 現代北京語に近い読み方以外の組み合わせの例

読み方の組み合わせ	語例 (読み方)
従来の漢字音 + 現代北京語に近い読み方	混老頭 (ホンロウトウ)、三色同刻 (サンショクドウコー)、小四喜 (ショウスーシー)、大四喜 (ダイスーシー)、清老頭 (チンロウトウ)、九蓮宝燈 (チューレンポウトウ)、万子 (マンズ)、三元牌 (サンゲンパイ)
従来の漢字音	三色同順 (サンショクドウジュン)、一気通貫 (イツキツウカン)、小三元 (ショウサンゲン)、大三元 (ダイサンゲン)、老頭牌 (ロウトウハイ)
従来の漢字音も現代北京語に近い読み方も可	字牌 (ツーパイ=ジハイ)、数牌 (シューパイ=スウハイ)、白 (パイ=ハク)、発 (ファ (一) =ハツ)、中 (チュン=チュウ)、九 (チュー=キュウ)

3-1 で検証したように、表二十二に挙げられた例は古い読み方では元々現代北京語に近い読み方をしていた。その語例数は麻雀用語の全体を占める割合が高くないが、現代北京語に近い読み方から従来の漢字音に切り替え、もしくは両方の読み方を持つのはなぜであろう。

田島優 (2006 : 2-3) によれば、漢字表記の使用は書記的・解読的に分けられる。麻雀用語は漢字表記が使われているため、正式な読み方を知らずとも、書記的立場から漢字表記に合わせて従来の漢字音だけに頼って読むのはあながち間違いとも言えない。現代北京語に近い読み方：「老 (ラオ)」、「色 (ソー)」、

「小 (シャオ)」、「気 (チー)」、「白 (パイ)」などの語は漢字表記と読み方が何らかの字音対応関係をなしているため、解読的立場から読んだわけではない。つまり、一般的に使う何種類もある常用漢字の音訓を加えた上で、記憶力を費やしてこのような語を覚えなければならない。

したがって、麻雀を全く知らなければ、現代北京語に近い読み方をすべき麻雀用語に従来の漢字音もしくは訓読みを当てる人は少なからずいると思われるが、これは書記的立場から従来の漢字音を使う便利性を利用しているわけである。しかし、いくら便利とは言え、音韻的・意味的・出自的理由で、現代北京語に近い読み方は根強く定着している。表二十二に見られる現代北京語に近い読み方以外の組み合わせの例は書記的立場から従来の漢字音を多用しているため、その名残から正式的読み方に昇格したと考えると良いのであろう。

(b) 意味的理由

麻雀用語の特徴の一つ、現代北京語に近い読み方から従来の漢字音に変化した用語があると検証したように、現代北京語に近い読み方から、現在完全に従来の漢字音に依るようになったもしくは従来の漢字音の読み方を持ち合わせている用語がある。その例を表二十三のようにまとめてみる。

表二十三 従来の漢字音に完全変化した麻雀用語

語例	読み方	語例	読み方
三色同順	サンショクドウジュン	発	ハツ (ファ (一))
一気通貫	イツキツウカン	中	チュウ (チュン)
小三元	ショウサンゲン	九	キュウ (チュウ)
大三元	ダイサンゲン	少牌	ショウハイ (シャオパイ)
字牌	ジハイ (ツーパイ)	多牌	タハイ (ターパイ)
数牌	スウハイ (シューパイ)	打牌	ダハイ (ターパイ)
老頭牌	ロウトウハイ	倒牌	トウハイ (タオパイ)
白	ハク (パイ)		

以上に挙げた語例は現代北京語に近い読み方を使わなければならないという制限はない。「三色同順」、「一气通貫」、「小三元」、「大三元」、「老頭牌」は従来の漢字音読み限定で、ほかは従来の漢字音とも現代北京語に近い読み方とも成り立っている。

麻雀用語は音韻的・意味的・出自的理由から、現代北京語に近い読み方をするのが妥当であると述べた反面、仮に漢字表記と一般用語の漢字表記の意味違いが存在しない、すなわち漢字表記から推量する意味が一般用語の感覚に通じ合える場合、意味的に新しい意味を表さないため、現代北京語に近い読み方を取る意味的理由が失い、従来の漢字音に依るようになりやすいと考えられる。表二十三の用語の漢字表記に基づく意味を表二十四のようにまとめてみる。

表二十四 従来の漢字音に完全変化した麻雀用語の意味

語例	意味	語例	意味
三色同順	三種類の数牌が同順子	発	発そのもの
一气通貫	123+456+789を揃う役	中	中そのもの
小三元	三元牌を各3、3、2個以上揃う役	九	九(万、索、筒)
大三元	三元牌を各3個以上揃う役	少牌	牌が足りない
字牌	文字の牌	多牌	牌があまる
数牌	数字の牌	打牌	牌を打つ
老頭牌	数牌の1(頭)と9(老)	倒牌	牌を倒す
白	白そのもの		

「老頭牌」の「老頭」はやや無理であるが、ほかの麻雀用語の意味合いは特に一般用語の感覚でその意味を解釈できる。つまり、意味的に一般用語と同じ意味解釈ができる現代北京語に近い読み方をする麻雀用語は従来の漢字音に変化もしくは持ち合わせるようになる傾向があると言える。

ほかに一般用語の漢字表記で解釈できる現代北京語に近い読み方をする麻雀用語はいかなるものかを見ると、完全に漢字表記が同義解釈ができる麻雀用語

は麻雀役において「緑一色」（緑色の牌が一揃い）と「字一色」（文字の牌が一揃い）、麻雀牌において「東南西北」と「一～八」（同じく牌そのものを指す）、他の麻雀用語において「紙牌」（紙製の牌）、「牌卓」（牌の卓）、「理牌」（牌の並べを整理する）がある。

これについて、「緑一色」と「字一色」は漢字表記でその意味を解釈できるため、従来の漢字音に依るとよろしいと思われるが、「一色」を含めているため、「清一色」、「混一色」と類推的構成が見られる。また、「紙牌」、「牌卓」、「理牌」も類推的構成と言える。一方、「東南西北」と「一～八」（九は例外として扱う）も類推的構成をなしている。複数の読み方を持ち合わせる「白発中」は類推的構成をしているとは言いがたいのが対照的である。

つまり、意味的に一般用語と同じ意味解釈ができる現代北京語に近い読み方をする麻雀用語は従来の漢字音に依るもしくは持ち合わせるようになる傾向があると言えるが、類推的構成を成すほかの麻雀用語との読み方の均一性を保つ原則が介在している。

(c) 表現的理由

「常用漢字表」（2136 字）の制定により、現在はより多い漢字表記を容認するようになっており、漢字における表記規範が緩くなっている。これに関連して、陣内正敬（2007：17）によれば、日本語における「ポストモダン現象」、つまり現代の大衆消費社会では、言葉に「正しさよりもふさわしさや表現の効果が重視され、それはその場や個人の選択にかなり任される」ことが意識された結果の一つと言える。

したがって、近現代中国語由来と思われる用語の正しい読み方を求めるよりも、麻雀用語の漢字表記語に個人の選択で漢字の読み方を取るのもおかしくな

い。もともと、「遊び性」の濃い色を帯びる麻雀用語においては、規範というものの自体があまり意識されていない。例えば：「同（トン→ドウ）」、「大（ター→ダイ）」、「三色同順（サンソートンシュン→サンショクドウジュン）」のように、元々現代北京語に近い読み方を従来の漢字音に切り替えようとも、漢字表記の書記的立場から見れば、あながち間違いとは言えない。

また、高度情報化社会である現在では、入力方法はほとんどパソコンに頼るが、麻雀用語は最初から入力システムに取り込まれていない。したがって、音韻的・意味的・出字的理由から、例えば：「三元」、「老頭」、「白」などはそれぞれ「サンユアン」、「ラオトー」、「パイ」であるべきとわかっているつもりでも、パソコンでこれらの用語を表現する際に、他所からコピーする以外に、従来の漢字音に頼って、その用語を書き出すほかなかった。ましてや麻雀用語の予備知識を持っていない人は、パソコンでなくても、それを表現するには従来の漢字音と混同してしまおうとも、仕方がないと言えようがない。

まとめてみると、音韻的・意味的・出字的理由から、近現代中国語由来の麻雀用語を現代北京語に近い読み方にするのは妥当であるが、一部の用語が従来の漢字音に変化した原因は以下のように考えられる：

- (a) 書記的に従来の漢字音を当てると便利度高いためである。
- (b) 意味的に一般用語と同じ意味解釈ができるためである。
- (c) 表現的に規範表記が存在しないためである。

と大体説明がつく。

3-2-3、それぞれ読み方の成立理由比較

前節では、麻雀用語における現代北京語に近い読み方と従来の漢字音に依る

読み方それぞれの成立経緯に仮説を立てた。結論として、麻雀用語の漢字表記語を考察することによって、麻雀用語が現代北京語に近い読み方をする理由は以下である。

- (a) 音韻的に新鮮な印象を与えられるためである。
- (b) 意味的に新しい意味を表わせるためである。
- (c) 出自的に近現代中国語からの語彙として弁別できるためである。

と考えられる。

一方、一部の用語が従来の漢字音に依るようになった理由は以下である。

- (a) 書記的に従来の漢字音を当てると便利度高いためである。
- (b) 意味的に漢語と同じ意味解釈ができるためである。
- (c) 表現的に規範表記が存在しないためである。

と考えられる。

次に、麻雀用語のそれぞれ読み方の成立理由を取り上げ、表二十五で比較してみる。

表二十五 読み方の成立理由比較

現代北京語に近い読み方	従来の漢字音に依る読み方
(a) 音韻的 (新鮮性)	(a) 書記的 (便利性)
(b) 意味的 (斬新的)	(b) 意味的 (伝統的)
(c) 出自的 (制約性)	(c) 表現的 (自由性)

(a) について、麻雀用語に音韻的新鮮性が求められる一方、それに伴う記憶力の浪費を軽減する効果がある書記的便利性も求められることが対照的である。

(b) について、麻雀用語に新しい意味に新しい読み方が定着する一方、一般用語と同じ意味解釈できるものが従来の漢字音に依る表裏の一致性が見られる。

(c) について、麻雀用語に出自的に元来あるべき姿を示す一方、個人的に言葉

を表現するパロール⁴⁵が自然に滲み出る言語現象の現れである。

以上は麻雀用語の読み方の特徴に沿い、現代北京語に近い読み方と従来の漢字音に依るものに両分した原因を分析した。麻雀用語は専門用語の色が濃く、現代北京語に近い読み方に恣意的に従来の漢字音が介在するとのイメージであったが、その成立経緯を探れば、やはりそれぞれの用語にそれぞれの理由により、成り立っていることが分かった。



⁴⁵ パロール【(フランス) parole】言語学者ソシュールの用語。「言(げん)」と訳される。社会制度としてのラングに依拠しながら、個々人が個々の場面で行使する言葉。『大辞泉』による。

3-3 まとめ

本章ではまず、従来の漢字音に依らない読み方をする麻雀用語における漢字表記語は実際にどれほど存在しているかを明らかにした。その結果、従来の漢字音に依らない読み方は大きい割合を占めていることが分かった。また、原語と思われる現代北京語との相似度を比較することによって、いくつか例外があるものの、現代北京語にかなり近いということを再確認した。

次に、麻雀用語（麻雀役、麻雀牌、一般麻雀用語）における漢字表記語の語例の読み方を分析した上に、それぞれの特徴をいくつか明らかにした。それは現代北京語に近い読み方を含む用語が多いが、従来の漢字音に依るようになった用語もある。最初から従来の漢字音に依る用語は日本オリジナルのルールや名称がほとんどである。また、麻雀役、麻雀牌に属している用語は非可換性が高く、麻雀用語における位置づけを示している。

最後に、麻雀用語における漢字表記語の読み方が現代北京語に近い読み方と従来の漢字音に依るものに両分した原因を探ってみた。麻雀用語において、現代北京語に近い読み方は音韻的（新鮮性）、意味的（斬新的）、出自的（制約性）理由から、従来の漢字音に依るものは書記的（便利性）、意味的（伝統的）、表現的（自由性）理由から、それぞれの読み方にそれぞれの成立経緯があった仮説を立てた。

第四章、麻雀用語から論証する新しい漢字音の成立

第二章の先行研究に沿って、日本の漢字音システムについて、現在では「呉音」「漢音」「唐宋音」という分け方が主流であるが、「唐宋音」を音韻的特徴に捉え、さらに「宋音」「唐音」と分ける説がある⁴⁶。呉音（五一六世紀）は一番早く日本に伝来した漢字音で、最初に日本語に定着していた⁴⁷。時代が下がって、遣隋使・遣唐使が派遣されたことによって、改めて当時の文化中心—中原地方で使われている「正音」に切り替えようと政府の政策に相まって、呉音の読み方は「和音」として軽蔑される対象となり、一部の用語の読み方が漢音の読み方に変ったものもあるが、呉音はもともとかなり日本語に浸透していたため、仏教用語もしくは日常語に残った⁴⁸。

九世紀から遣唐使が一旦止まり、中国との正式交流は途絶えたが、宋王朝以降、禅僧と貿易商人が主役を担うようになったため、新しく中国から伝来したものは、禅宗や当時の日常器具の語彙に関わるものが多い⁴⁹。しかし、以前と比べ、中国語にはかなりの音韻変化が起きたため、その伝来した用語は、漢音とも呉音とも噛み合わない。湯沢質幸（1987：8-9）によれば、（一）宗教的に弁別が必要、（二）新鮮な印象を求める、（三）新しく伝わってきた文物にその印象を合わせるために、正式的な漢字音があるにもかかわらず、当時の中国語の読み方を取り入れて、唐宋音が成立した原因を説いた。

しかし、江戸時代後期から明治時代に入ると、従来の漢字音と異なる読み方をする近現代中国語からの語彙、例えば：老麺（ラーメン）、烏龍茶（ウーロン

⁴⁶ 先行研究に前掲した高松政雄（1986：239-305）『日本漢字音概論』（風間書房）、沼本克明（1991：14）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）などに参照。

⁴⁷ 築島裕（1983：775）「漢字音」『国史大辞典』第3巻（吉川弘文館）。

⁴⁸ 先行研究に前掲した高松政雄（1986：145-155）『日本漢字音概論』（風間書房）、沼本克明（1991：7-9）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）に参照。

⁴⁹ 藤堂明保（1982：161-165）『漢字の過去と未来』（岩波新書）。

チャ)、麻雀 (マーじゃん) などが伝来した⁵⁰。また、近現代中国人名、地名、例えば「孫文 (スンウェン)」、「上海 (シャンハイ)」などの語彙も従来の漢字音と違う読み方になっている。したがって、中国から伝来した語彙は時代順によって、呉音、漢音、宋音、唐音に分けており、それぞれに成立経緯があるように、近現代中国語からの語彙における従来の漢字音に依らない読み方について、第三章で麻雀用語を検証材料として考察することで、その読み方の特徴によって、音韻的・意味的・出づきの理由としていささかその成立経緯を検討してみた。

また、現在の漢字音研究、特に呉音・漢音を論述するものが多く、呉音・漢音から宋音・唐音になる接点は見られるが、それから近現代中国語からの語彙における従来の漢字音に依らない読み方に繋がる接点あまり論じられていない。しかし、その中に、麻雀用語は比較的系統的に日本語に伝来しているため、従来の漢字音に依らない読み方と従来の漢字音との連続関係を研究することによって、近現代中国語からの語彙の読み方のあり方を垣間見ることができ、新しい漢字音の成立する可能性を論証できると考えられる。

本章はまず麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方の字音対応表を整理し、いくつかの矛盾点を解釈する上に、その漢字表記及び原語と思われる現代北京語との字音対応関係を明らかにする。次に、その読み方の特徴を見出して、従来の漢字音の音韻的特徴との連続関係を明らかにすることで、新しい漢字音が成立する可能性を模索する。最後に、麻雀用語の読み方に見られる転記法の規則を示し、新しい漢字音の成立を裏付ける。

⁵⁰ 榎垣実 (1963 : 170) 『日本外来語の研究』 (研究社)。

4-1 読み方の字音対応関係

4-1-1 字音対応表

表二十六は麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方とそれに対応する漢字、現代北京語のピン音との対応表である。表記の原則として、複数の読み方 (#) が存在する場合、新旧を問わず採択し、ピン音のアルファベット順で表す。そして、漢字と読み方との字音対応関係、(a) 読み方と漢字表記の対応関係（漢字一字に一つの読み方に対応するか否か）及び (b) 現代北京語との対応関係（現代北京語と相似しているか否か）を明らかにすることを試みる。

表二十六 字音対応表

No.	表記	読み方	ピン音	No.	表記	読み方	ピン音
1	安	アン	an	82	面	メン	mian
2	暗	アン	an	83	明	ミン	ming
3	八	パー	ba	84	摸	モ (一)	mo
4	板	パン	ban	85	南	ナン	nan
5	般	パン	ban	86	牌	パイ	pai
6	包	パオ	bao	87	碰	ポン	peng
7	宝	パオ	bao	88	平	ピン	ping
8	北	ペー	bei	89	気	チー	qi
9	盃	ペー	bei	90	七	チー	qi
10	壁	ピー	bi	91	砌	チー	qi
11	辺	ペン	bian	92	起	チー	qi
12	餅	ピン	bing	93	棋	チー	qi
13	不	プー	bu	94	前	ゼン	qian
14	財	ツアイ	cai	95	槍	チャン	qiang
15	吃	チー	chi	96	清	チン	qing
16	沖	チョン	chong	97	#圈	チャン、チェン、 チュアン	quan
17	銃	チャン	chong	98	#雀	ジャン、チャン	que
18	籌	チャー	chou	99	全	チャン	quán

19	幢	トン	chuang	100	撈	ラオ	rao
20	#錯	チョン、ツオ	cuo	101	#人	レン、リエン	ren
21	大	ター	da	102	立	リー	ri
22	打	タ (一)	da	102	理	リー	ri
23	帯	タイ	dai	104	零	リン	ring
24	単	タン	dan	105	賽	サイ	sai
25	倒	タオ	dao	106	三	サン	san
26	燈	トン	deng	107	散	サン	san
27	地	チー	di	108	色	ソー	se
28	底	テー	di	109	骰	シャイ	shai
29	吊	チャオ	diao	110	上	シャン	shang
30	東	トン	dong	111	少	シャオ	shao
31	断	タン	duan	112	生	ション	sheng
32	対	トイ	dui	113	十	シー	shi
33	多	ター	duo	114	屍	シー	shi
34	#發	ファ (一)、 ハー	fa	115	洗	シー	shi
35	#飜	ファン、ハン	fan	116	熟	ショー	shou
36	風	フォン	feng	117	数	シュー	shu
37	浮	フー	fu	118	双	シャン	shuang
38	副	フー	fu	119	順	シュン	shun
39	楨	カン	gang	120	四	スー	si
40	高	カオ	gao	121	算	サン	suan
41	骨	クー	gu	122	#索	ソー、サオ	suo
42	#貫	カン、コワ ン、ガン	guan	123	塔	ター	ta
43	海	ハイ	hai	124	天	テン	tian
44	好	ハオ	hao	125	聽	テン	ting
45	#和	ホー、フ (一)	he	126	同	トン	tong
46	河	ホー	he	127	通	トン	tong
47	#紅	ホン、フォン	hong	128	筒	トン (ピン)	tong
48	湖	ホ	hu	129	頭	トー	tou
49	#花	ファ、ホワ、 ホー	hua	130	推	トイ	tui

50	混	ホン	hun	131	万	ワン	wan
51	即	チー	ji	132	王	ワン	wang
52	加	チャ	jia	133	五	ウー	wu
53	家	チャ	jia	134	無	ウー	wu
54	尖	チェン	jian	135	#西	シー、シャー	xi
55	見	チェン	jian	136	喜	シー	xi
56	将	チャン	jiang	137	戲	シー	xi
57	井	チン	jing	138	下	シャ (一)	xia
58	九	チュー	jiu	139	#先	シェン、セン	xian
59	開	カイ	kai	140	向	シャン	xiang
60	嵌	カン	kan	141	小	シャオ	xiao
61	靠	シー	kao	142	星	シン	xing
62	刻	コー	ke	143	牙	ヤー	ya
63	客	コー	ke	144	么	ヤオ	yao
64	控	コン	kong	145	葉	イエ	ye
65	口	コー	kou	146	一	イー	yi
66	款	カン	kuan	147	遊	ユー	you
67	老	ラオ	lao	148	魚	ユイ	yu
68	了	ラ	le	149	元	ユアン	yuan
69	蓮	レン	lian	150	月	ユエ	yue
70	連	レン	lian	151	張	チャン	zhang
71	両(二)	リヤン	liang	152	直	チ	zhi
71	嶺	リン	ling	153	紙	チー	zhi
72	六	ロー	liu	154	中	チュン	zhong
73	栄	ロン	long	155	種	チョン	zhong
74	龍	ロン	long	156	#莊	チャン、 チョワン	zhuang
75	露	ロ	lou	157	卓	チュオ	zhuo
76	緑	リュー	lü	158	#子	ツ (一)、ズ	zi
77	輪	ロン	lun	159	字	ツー	zi
78	馬	マー	ma	160	自	ツ (一)	zi
79	麻	マー	ma				
80	満	マン	man				
81	門	メン	men				

表二十六の字音対応表に示された計 160 字の中に、長音の有無と当て字「筒 (ピン)」「餅」と表記すべき)を含め、漢字一字に一つの読み方に対応する原則に従うものは計 145 字 (90.6%)、ほかに複数の読み方を持つ漢字 (#) は計 15 字 (9.3%) である。以下では複数の読み方を持つ漢字 (#) を共時的立場 (複数の読み方が現在同時に使われているもの) と通時的立場 (古い読み方から現在の読み方に変化したもの) に分けてみると、表二十七のようになる。

表二十七 複数の読み方を持つ漢字

	字音対応
共時的	「錯 (ツオ=チョン)」、「発 (ファ (一) =ハー)」、「翻 (ファン=ハン)」、「和 (ホー=フ (一))」、「紅 (ホン=フォン)」、「花 (ホワ=ファ=ホー)」、「圈 (チェン=チャン)」、「先 (シェン=セン)」、「子 (ツ (一) =ズ)」
通時的	貫 (コワン、カン→ガン)、「圈 (チュアン→チャン、チェン)」、「雀 (チャン→ジャン)」、「人 (リエン→レン)」、「索 (サオ→ソー)」、「西 (シー→シャー)」、「莊 (チョワン→チャン)」

以下は複数の読み方を現代北京語と比較し、それぞれの特徴を考察してみる。

表二十八は共時的立場から見る読み方の特徴を示そうとするものである。

表二十八 共時的立場から見る現代北京語との比較

読み方の特徴	字音対応
ほぼ相似	「錯 (ツオ)」、「発 (ファ (一))」、「翻 (ファン)」、「和 (ホー)」、「紅 (ホン)」、「花 (ホワ)」、「圈 (チェン)」、「先 (シェン)」、「子 (ツ (一))」
訛る読み方	「錯 (チョン)」、「発 (ハー)」、「翻 (ハン)」、「和 (フ (一))」、「紅 (フォン)」、「花 (ファ、ホー)」、「圈 (チャン)」、「先 (セン)」
連濁形	「子 (ズ)」

通時的立場から現代北京語と比較した結果、ほぼ相似しているもの、例えば：「錯（ツオ）」、「発（ファ（一）」）と、訛ったもの、例えば：「翻（ハン）」、「和（フ（一）」）に分けられる。また、複数の読み方のように見えるが、「子（ズ）」は「子（ツ）」の連濁形と考えたほうが妥当であろう。

次に、表二十九は通時的立場から読み方の特徴を示そうとするものである。

表二十九 通時的立場を現代北京語との比較

読み方の特徴	字音対応
簡略化 (直音化、唇音化)	「圈（チュアン→チャン、チェン）」、「人（リエン→レン）」、「索（サオ→ソー）」、「荘（チョワン→チャン）」、「貫（コワン→（カン）→ガン）」
訛る読み方	「西（シー→ジャー）」
連濁形	「雀（チャン→ジャン）」、「貫（カン→ガン）」

以上にまとめたように、通時的立場から現代北京語との比較した結果、例えば：「リエン→レン」、「チョワン→チャン」のように、現在の読み方は古い読み方より簡略化（直音化、唇音化）されたものである。「西（ジャー）」は簡略化された読み方とは言えないが、古い読み方「西（シー）」と比べると、現代北京語に訛っている。また、複数の読み方のように見えるが、現在の読み方「雀（ジャン）」、「貫（ガン）」はそれぞれの古い読み方「チャン」、「クワン→カン」の連濁形と考えたほうが妥当であろう。

以上で複数の読み方を共時的・通時的立場に分けてみたように、その複数の読み方は元来の一つの読み方、それもほぼ現代北京語と相似している読み方（「雀」はやや離れているため、例外として扱う）から「簡略化」、「訛る読み方」、「連濁形」に変化したもので、お互いに関わっている。つまり、複数の読み方において、時代及び転記法により、いささか読み方に相違はあったものの、「簡

略化]、「訛る読み方」、「連濁形」の読み方を除けば、漢字一字に一つの読み方に対応する原則と現代北京語と相似している特徴から、(a) 読み方と漢字表記の対応関係及び (b) 読み方と現代北京語との対応関係は確実と言える。

しかし、表二十六の字音対応表によると、また問題点が残されている。それは、一部従来の漢字音に依らないもの、例えば：「幢（トン）」、「地（チー）」、「吊（チャオ）」など近現代中国語に由来したと思われる読み方に、現代北京語との落差が見られ、さらに解釈する必要がある。(a) 読み方と漢字表記の対応関係及び (b) 読み方と原語と思われる現代北京語との対応関係は複数の読み方を共時的・通時的に検証することによって、確実なもの確認できたが、この問題点を解決すれば、その関係がさらに明らかになる。次は原語との落差という問題に取りかかる。

4-1-2 原語との落差

表二十六の字音対応表によると、一部の字音対応が現代北京語との落差があることが分かった。それについて、木村哲也（1994）、千田俊太郎（2009）は、それが訛ったものであると述べているように、一部の字音対応はそれによって解釈できる。

訛った読み方として「幢（トン）」、「地（チー）」、「底（テー）」、「吊（チャオ）」、「多（ター）」、「和（ホー、フ（ー）」、「湖（ホ）」、「靠（シー）」、「六（ロー）」、「銃（チャン）」、「雀（ジャン）」、「聽（テン）」、「中（チュン）」などが挙げられる⁵¹。したがって、現代北京語由来と思われる読み方と現代北京語との落差に

⁵¹ ほかに「錯（チョン）」、「発（ハー）」、「翻（ハン）」、「和（フ（ー）」、「紅（フォン）」、「花（ファ、ホー）」、「圈（チャン）」、「西（シャー）」、「先（セン）」も挙げられるが、複数の読み方における訛った読み方で、現代北京語に近い読み方の原型に辿ることができる。

ついて、(a) 従来の漢字音による干渉、(b) 中国方言（呉語）による影響、(c) 日本語の音韻的規則による改変という理由から説明する。

(a) 従来の漢字音による干渉

従来の漢字音の干渉を受けた字音について、「幢（トン）」、「多（ター）」、「六（ロー）」、「中（チュン）」がそれに当たる。「幢（トン）」について、木村哲也（1994：53）が指摘しているように、元々は「チャン」のように読まれたほうが現代北京語に近いが、これは従来の漢字音「童（ドウ）」からの類推にあたる。同じく、「多（ター）」は「多（タ）」、「六（ロー）」は「六（ロク）」、「中（チュン）」は「中（チュウ）」からの干渉を受けていると考えられる。

つまり、「幢（トン）」、「多（ター）」、「六（ロー）」、「中（チュン）」は訛った読み方のように見えるが、実際は従来の漢字音の干渉により、今の形になっていることである。これについて、すでに木村哲也（1994）、千田俊太郎（2009）によって指摘されており、複雑な原因によるものでもないため、ここでは個別の説明を割愛する。

(b) 中国方言（呉語）による影響

麻雀というゲームは馬吊から派生したカード系の碰和牌と骨牌系の天九牌と融合して誕生したという説がある⁵²。その起源地と確実な発明者について、『大百科事典』（1933年）、『大日本百科事典（ジャポニカ）』（1972年）、『ブリタニカ国際大百科事典』（初版1975年、2版1994年）によると、浙江省寧波に住んでいた陳魚門により発明されたという説が有力である。

その確実な発明者についてまだほかに色々な説はあるが、起源地については中国南部、特に江蘇・浙江由来は確実である。麻雀用語には現代北京語由来と

⁵² 前掲注6を参照。

思われる読み方が多いが、起源地（江蘇・浙江）の方言、つまり呉語による影響もありえると考えられる。「和（フ（一）」、「湖（ホ）」、「雀（ジャン）」が現代北京語からの借用と大きく食い違っていることは、その名残と考えられる。

この仮説を立てるにあたり、基本的に『明清呉語詞典』（2005年）を依拠にするが、呉語はさらに上海話、蘇州話などに細分化できるため、多方面に捉えるように、「呉音小字典」（呉語協会）をも参考に、呉語による影響を検証する。

まずは「雀（ジャン）」について、金子尚一（1999：151）は日本人が「マーチャン」を指すときに、なぜか本場の中国で使われる「麻将」ではなく、「麻雀」を用いることに理解出来ない現象について、「雀」は最初に無意味にかかわらず、それが「マーチャン」というゲームのイメージとリンクすればそれで成り立つという結論を出した。

しかし、金子尚一（1999：151）は、広東語において、「麻将を打つ」ことを指す時に、なぜか日本語と同じく「麻雀を打つ」が使えることに触れていない。実際、麻雀が盛んに行われている台湾・香港では、「麻将」を指すときにも、日本語と同じ漢字表記の「麻雀」⁵³を使うことが窺える、呉語を加えて、その異同を表三十のようにまとめてみる。

表三十 各言語における「マーチャン」の表記・読み方の比較

言語	現代北京語	呉語	広東語	閩南語	日本語
漢字表記	麻将	麻雀	麻雀	麻雀	麻雀
読み方	マーチャン	マーチャク ⁵⁴	マーチェク	マーチョク	マーチャン

呉語、広東語、閩南語、日本語を見る限り、「麻雀」の発音はそれぞれ違うが、漢字表記として「麻雀」だけは一致している。麻雀の起源地（江蘇・浙江）は

⁵³ 「台湾閩南語常用詞辞典」（中華民国教育部）：<http://twblg.dict.edu.tw>、「現代標準漢語與粵語對照資料庫」（香港中文大學）：<http://win2003.chi.cuhk.edu.hk/hanyu/>

⁵⁴ 「ク」は入声音、広東語・閩南語における「ク」も同じ入声音である。

「麻雀」が原型で、広東語・閩南語にはその読み方を取らなかったが、「麻雀」という形が保たれたと考えられる。現代北京語には「麻雀」を取らなかったが、その読み方「マーチャク」を取り入れ、入声音「ク」が脱落した形「麻将（マーチャン）」を使ったと考えられる⁵⁵。一方、日本語には「麻雀」という漢字表記の形と呉語の読み方「マーチャク」両方を取り入れて、古い読み方では「マーチャン」、その「チャン」が転訛して「ジャン」になり、現在の形「マージャン」となったと推論できる⁵⁶。

したがって、日本人が「マージャン」を指すときに、なぜか「麻将」ではなく、「麻雀」を用いることに理解出来ないのは、呉語・広東語・閩南語には「麻雀」も使われ、呉語によるものが知られていないためである。つまり、呉語との関係を検証により、「雀（ジャン）」は現代北京語ではなく、呉語「チャク」による影響で生まれたと考えられる。

次に、「和」については、同じ意味で中国、台湾、香港では「胡」が多用されるため、その使い分けと読み方を表三十一のように比較してみる。

表三十一 各言語における「和・胡」の使い分けと読み方の比較

言語	現代北京語	呉語	広東語	閩南語	日本語
漢字表記	胡（和）	和	胡	胡	和
読み方	フー（ホー）	ウー、フー	ホー	ホー	フー、ホー

「和（フ（ー）」は呉語で「ウー、フー」になっているため、この表を見ると、現代北京語、広東語、閩南語より、日本語のほうが麻雀の原型「和」とそ

⁵⁵ 徐珂（1986：4906）によると：「抑又思之、麻雀、馬吊之音之轉也。吳人呼禽類如刁、去聲讀、不知何義、則麻雀之為馬吊、已確而有徵矣。」。胡適（1998：39）によると：「馬吊三人對一人、故名「馬吊脚」、省稱『馬吊』；『麻将』為『麻雀』的音變、『麻雀』為『馬脚』的音變。」。つまり、馬吊（馬吊）→麻雀→麻将の順でその名称が変わっているわけである。

⁵⁶ 倉茂貞助（1972：693）「麻雀」『大日本百科事典（ジャポニカ）』巻16（小学館）によると、「マージャン」は「馬吊（マーチャオ）」→「麻将（マーチャン）」→「麻雀（マージャン）」の転訛とされている。

の読み方「フー」が保留されていることが分かった。「和（ホー）」という現代北京語に近い読み方を加えて、「和（フ（ー）」は呉語の影響で生まれたと考えられる。同じく、「湖」は呉語で「ウー、ホー」になるため、「湖（ホ）」はその影響を受けていると考えられる。

(c) 日本語の音韻的規則による改変

「前（ゼン）」、「底（テー）」などの字音が従来の漢字音に同形であるが、3-1では一般的に片仮名か平仮名表記によって

従来の漢字音に依らない読み方として扱う立場を取った理由に触れたが、その読み方は現代北京語とはやや離れて、さらに解釈を加える必要がある。ほかには、「地（チー）」、「吊（チヤオ）」、「聴（テン）」、「多（ター）」が同じ理由で解釈できる。

もし「前」、「底」、「地」、「吊」、「聴」、「多」が現代北京語により近い読み方をすれば、どのように表記すれば良いかは、仮に「前（チェン）」、「底（ティー）」、「地（ティー）」、「吊（ティアオ）」、「聴（ティン）」、「多（トゥオ）」とする。なぜ最初からこのような読み方を取らないかというと、このような読み方は日本語の音韻的規則に合わないためと考えられる。

正確に言うと、「チェ」、「ティ」、「トゥ」という読み方は、例えば：「チェック (Check)」、「チェス (Chess)」、「ティーチャー (Teacher)」、「トゥーン (Toon)」などの語例は現在外来語にもよく使われている。しかし、麻雀が日本に伝来した初期に当たる時期は、「チェ」、「ティ」、「トゥ」を読み方として使っていた語はあるかは問題である。

小林千草（2009：30-40）は夏目漱石が1908年に新聞紙で連載した『三四郎』（1909）に出てくる外来語を整理したことがある。それが麻雀が日本に伝来し

た初期に当たるため、その語例を検証の材料として表三十二に取り上げる。

表三十二 『三四郎』における外来語表記

表記	現代語語例	『三四郎』における表記
エ	「エフェクト」	「エフェクト」
テイ	「アーティスト」 「ロマンティック」	「アーチスト」 「ロマンチック」
トゥ	「トゥー ラブ (to Love)」	「ツー ラツブ (to Love)」

「チェ」は直接の例はないが、この時代では「エ」を単音「エ」で表記するのが普通である。「テイ」は「チ」、「トゥ」は「ツ」と表記した。また、昭和29年の国語審議会部会報告「外来語の表記について」では、「テイ、ディ」はなるべく「チ、ジ」、「トゥ、ドゥ」は「ト、ド又はツ、ズ」と書くとしていたことが分かった⁵⁷。そして、「テイ、ディ」について、拗音の単音表記の影響を受けて、「テ、デ」になるものもある（例えば：「ティー (T) →テー」）、「アイディア (idea) →アイデア」。つまり、外来語の原音を採るよりも、日本語の従来音韻的規則に合わせて国語化しようとした努力が見られる。

このような音韻的規則を上述した麻雀用語に当てると、従来音の漢字音の干渉を含めて、それぞれ「底 (ティー→テー)」、「地 (ティー→チー)」、「吊 (ティアオ→チャオ)」、「聴 (ティン→テン)」になったわけ考えられる。また、その原則によって、「前」、「多」は「チエン」、「ツオ (トオ)」になるはずであったが、「チェ」や「ツオ (トオ)」もまた従来音の漢字音や当時の外来語の読み方に見られない形で、それぞれ転訛もしくは漢字音の干渉を受けて、現在の形「前 (ゼン)」、「多 (ター)」になったと考えられる。

まとめてみれば、従来音の漢字音に依らない読み方と現代北京語との落差解釈

⁵⁷ 文化庁 (1991) 「外来語の表記」 (平成3年内閣告示第2号)。

は (a) 従来の漢字音による干渉、(b) 中国方言 (呉語) による影響、(c) 日本語の音韻的規則による改変、という理由から大体説明がつく。しかし、「銃 (チャン)」、「靠 (シー)」の字音が原語との落差解釈は以上の理由で説明できない。確証はないが、「銃 (チャン)」は「槍 (チャン)」と類推したもの⁵⁸、「靠 (シー)」は「筒 (ピン)」(「餅」と表記すべき)のように、他の漢字に由来したもののかも知れない。いささかデータ不足で、今後の課題として残したい。

4-1-3 字音対応関係

表二十六の字音対応表をまとめてきたように、その字音対応は大抵漢字一字に一つの読み方の原則に沿っている。複数の読み方の字音対応は見られるが、古い読み方、訛った読み方及び連濁形を除くと、ほぼ漢字一字に一つの読み方の原則に従い、現代北京語とも相似している。つまり、従来の漢字音に依らない読み方に、(a) 読み方と漢字の対応関係及び (b) 読み方と現代北京語との対応関係は確実なものと思なして良いと考えられる。

また、一部の読み方は原語と思われる現代北京語に訛っているものがある。これについては、(a) 従来の漢字音による干渉、(b) 中国方言 (呉語) による影響、(c) 日本語の音韻的規則による改変があったと考えられる。そのいくつか影響を受けた字音はあったが、従来の漢字音に依らない読み方は現代北京語由来の読み方がベースになっていることは明らかである。つまり、麻雀用語に見られる従来の漢字音に依らない読み方は現代北京語に深く関わっており、現代北京語から借用した読み方としても称すべきである。

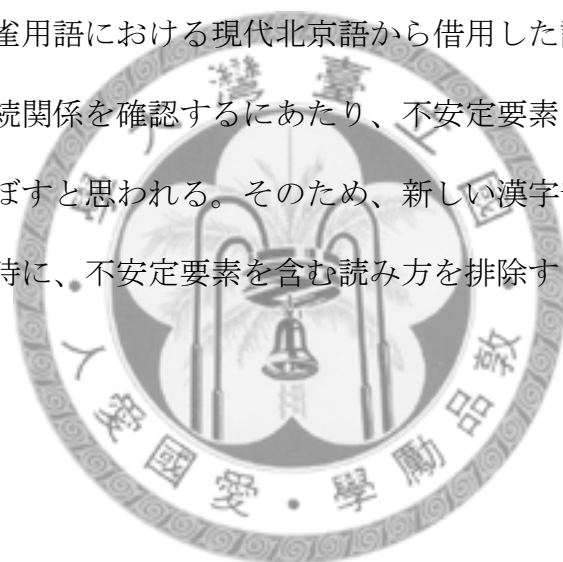
したがって、現代北京語から借用した読み方が漢字表記及び現代北京語との

⁵⁸ 中国・香港・台湾では「放銃」＝「放槍」が同義であるため、「銃」を「槍 (チャン)」の類推として、「銃 (チャン)」という読み方が成立していたとも考えられる。

字音対応関係については、以上の分析により明らかにした。その関係を踏まえた上に、現代北京語から借用した読み方は大抵現代北京語に相似しているということが前提になっているが、以下のような特徴を持つ読み方が見られる。

- (a) 訛った読み方と連濁形がある。
- (b) 従来の漢字音の干渉を受けた読み方がある。
- (c) 中国方言（呉語）による影響がある。
- (d) 日本語の音韻に合わせて改変された読み方がある。

以上のような特徴を持つ読み方は便宜上、現代北京語から借用した読み方とする。しかし、麻雀用語における現代北京語から借用した読み方の特徴から従来の漢字音との連続関係を確認するにあたり、不安定要素を含む読み方がその的確性に影響を及ぼすと思われる。そのため、新しい漢字音が成立するという可能性を論証する時に、不安定要素を含む読み方を排除する。



4-2 従来の漢字音との連続関係

前節で示した字音対応表により、現代北京語から借用した読み方が漢字及び現代北京語との字音対応関係を明らかにした。その字音対応関係を踏まえ、不安定要素を排除した上に、現代北京語から借用した読み方はどのような特徴があるか、そして、その特徴を従来の漢字音と比較することによって、従来の漢字音との連続関係、しいては新しい漢字音が成立する可能性を探る。

4-2-1 読み方の特徴

現代北京語から借用した読み方は、従来の漢字音と比較すれば、主に以下のような音韻的特徴が見られる：(a) 宋音・唐音の特徴を多く継承、(b) 従来の漢字音に見られない音結合、(c) 濁音の消滅、(d) 一字二拍（モーラ）の構造。以下ではその音韻的特徴について、詳しい説明と語例を提示する。

(a) 宋音・唐音の特徴を多く継承

先行研究から踏まえれば、従来の漢字音と比べると、宋音・唐音の特徴は入声音-p, -t, -kの消失、唐音においては、軽唇音 f のハ行音表記と重唇音 p- のハ行音表記との区別、そして、喉音（曉母）のハ行音表記などの特徴が挙げられる。以上の特徴について、表二十六の字音対応表により、現代北京語から借用した読み方はその特徴を継承しているかどうかを分析する。

まずは入声音-p, -t, -kについて、現代北京語から借用した読み方には入声音表記は皆無である。もともと、現代北京語は入声音が存在していないため、日本語にはそれを借用した読み方に取り入れるわけもない。つまり、宋音・唐音に見られる入声音の消失という特徴を継承している。

次に、軽唇音 f と重唇音 p- の区別について、現代北京語ではそれぞれ軽唇音 f と重唇音 p- (p-、b-) になっているものは、現代北京語から借用した読み方に

表記される際に、どうなっているかを表三十三にまとめてみる。

表三十三 軽唇音 f-と重唇音 p-の読み方による区別

軽唇音 f-	重唇音 p- (p-、b-)
「発 (ファ (ー))」、「飜 (ファン)」、 「風 (フォン)」、「浮 (フー)」、 「副 (フー)」	「八 (パー)」、「板 (パン)」、「般 (パン)」、 「包 (パオ)」、「宝 (パオ)」、「北 (ペー)」、 「盃 (ペー)」、「壁 (ピー)」、「辺 (ペン)」、 「餅 (ピン)」、「不 (プー)」、「牌 (パイ)」、 「碰 (ポン)」、「平 (ピン)」

以上にまとめたように、軽唇音 f-の表記が「ファ行 (ファー、フー、フォー)」を使うことに対して、重唇音 p-の表記が「パ行」を使う。つまり、現代北京語から借用した読み方は軽唇音 f-と重唇音 p-の区別がつくことがわかる。唐音の重唇音 p-表記が「パ行」を使う特徴を継承している一方、軽唇音 f-表記が「ハ行」から「ファ行 (ファー、フー、フォー)」に切り替えたのがその音韻的特徴の違いである。

一方、喉音 (曉母) について、現代北京語では h-、x-に分化したが、匣母と齒音との区別が混同しており、便宜を図るように、現代北京語で h-、x-になっているものは、現代北京語から借用した読み方に表記される際に、どうなっているかを表三十四にまとめてみる。

表三十四 h-、x-の読み方による区別

h-	x-
「海 (ハイ)」、「好 (ハオ)」、「和 (ホー)」、 「河 (ホー)」、「紅 (ホン)」、「湖 (ホ)」、 「花 (ホワ)」、「混 (ホン)」	「西 (シー)」、「喜 (シー)」、「戲 (シー)」、 「下 (シャ (ー))」、「先 (シェン)」、「向 (シャン)」、 「小 (シャオ)」

以上にまとめたように、現代北京語で h-になるものはどれも「ハ行」を使い、x-になるものは「シャ行」を使うことが分かった。喉音 (曉母) で x-になるものは違うが、h-になるものが「ハ行」を使うことは唐音の特徴と共通している。

以上の特徴の比較により、現代北京語から借用した読み方は宋音・唐音の特徴を多く継承しており、その読み方の音韻的特徴に反映している。また、軽唇音 f の表記は、唐音における「ハ行」から「ファ行」に変わったが、むしろ h のハ行音表記との区別が付き、さらに使い分けがはっきり見られる。

(b) 従来の漢字音に見られない音結合

従来の漢字音に見られない音結合について、表十九で既に述べており、主に二つに分けている。(1) 従来の漢字音にない語頭から始まる読み方及び (2) 従来の漢字音に見られない音結合である。宋音・唐音は体系的にできていないため、どれ程度宋音・唐音から継承しているかを確定できないが、岡田袈裟男 (2006 : 549-589) で羅列した唐音と対照する限り、表三十五のようになる。

表三十五 従来の漢字音にない音韻的特徴比較

音結合	現代北京語から借用した読み方
同形	シャイ、シャン、ジャン、チャン、チュン、チョン、トイ、ハー、パー、パイ、パン、ピー、ピン、ペン、マー、リー、リャン
異形	イー、イエ、ウー、カオ、コワン、シー、シャー、シヤオ、ション、ター、タオ、チー、チェン、チャオ、チュオ、チョワン、ハオ、パオ、プー、ペー、ポン、ファー、ファン、フォン、ホワ、ヤオ、ユアン、ユエ、ラオ

以上にまとめたように、麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方を岡田袈裟男 (2006 : 549-589) が列挙した唐音と比較した結果、従来の漢字音に見られない音結合は約三分の一が同形である。つまり、現代北京語から借用した読み方には従来の漢字音に見られない音結合があるが、唐音から継承している部分があると言える。

(c) 濁音の消滅

表二十六から濁音の字音を挙げると、「雀（ジャン）」、「前（ゼン）」、「貫（ガン）」、「子（ズ）」四つの例がある。まずは「雀（ジャン）」について、いまはすっかり「雀（ジャン）」になったが、古い読み方を辿れば、「雀（チャン）」になっていたことがわかる。また、前述したように、「雀（ジャン）」は中国方言（呉語）から影響を受けた形であり、「雀（チャン）」からの転訛、または従来漢字音「雀（ジャク）」の語頭「ジャ」の影響を受け、現在の形「雀（ジャン）」になったと考えられる。

また、「前（ゼン）」について、前述したように、もともとは「チエン」になるものの、「チエ」が日本語の音韻的規則に合わなかったため、連濁形「前（ゼン）」になったわけである。

そして、「貫（ガン）」については、「満貫（マンガン）」という語から取ったもので、古い形では「満貫・満款（マンカン・マンコワン）」であったことから、「貫（ガン）」も「貫・款（コワン→カン）」が唇音化して連濁したものと思われる。また、意味としては違うが、漢語「満貫（マンガン）」（穴あき銭が、銭さしいっぱいになること）⁵⁹による干渉があった可能性がある。

最後に、「子（ズ）」については、現在では「子（ツ）」、「子（ズ）」両方とも使われている。木村哲也（1994：45）によれば、「ズ：zi」はciと弁別するためにわざと濁音と入れたわけと考えられると述べたが、麻雀用語に原語がciに当たる字音はないため、使い分けをする必要がないと思われる。したがって、古い読み方を辿れば、「子（ツ）」になっていたことから、やはり「子（ズ）」は「子（ツ）」から連濁したものと思われる。

⁵⁹ 藤堂明保等編（1993）『漢字源』EPWING版（学習研究社）

つまり、「雀（ジャン）」、「前（ゼン）」、「貫（ガン）」、「子（ズ）」は現代北京語から借用した読み方とするが、連濁形・従来の漢字音の干渉・中国方言の影響などの不安定要素を含んでいるため、それを排除すると、現代北京語から借用した読み方の特徴は濁音がないという特徴が明らかである。これは現代北京語には有声・無声の区別がなく、つまり濁音の概念がない（有声音はある）という特徴に合わせて、読み方はすべて清音で表記した原因と合致している。

(d) 一字二拍（モーラ）の構造

千田俊太郎（2009：20-21）は新漢語の特徴について、いくつかの語例を挙げて、「多くが二モーラ一音節をなす」と述べている。表二十五の字音対応表を見れば、現代北京語から借用した読み方に、確かにほぼ二モーラ一音節という構造が多い。また、二モーラ一音節は漢字一字に対応するため、一字二拍（モーラ）とも言える。一字二拍（モーラ）ではない字音を表三十六でまとめてみる。

表三十六 一字二拍（モーラ）ではない字音

読み方の構造	語例
一字一拍（モーラ）	「湖（ホ）」、「花（ファ）」、「了（ラ）」、「露（ロ）」、「直（チ）」、「子（ズ）」
拍（モーラ）の揺れが見られる字音	「打（タ（ー）」、「発（ファ（ー）」、「摸（モ（ー）」、「子（ツ（ー）」、「自（ツ（ー）」
一字三拍（モーラ）	「貫（コワン）」、「圈（チュアン）」、「元（ユアン）」、「莊（チョワン）」

不安定要素が含まれる字音：「湖（ホ）」（呉語による影響）、「花（ファ）」（訛る読み方）、「子（ズ）」（連濁形）を除いて、以下では一字二拍（モーラ）ではない字音について説明する。

千田俊太郎（2009：20-21）は一字二拍（モーラ）でない字音について、「語末の長音が嫌はれることは、「コンピュータ（ー）」など一般語彙の外来語でも

長短の揺れが見られるやうに、新漢語に特有の現象ではない」、「競技規定上発声義務づけられてある行為の宣言は「ポン、チー、カン、リーチ、ロン、ツモ」に限られ、リーチ以外は全て二モーラ語である。…そこで「ツモ」は他の二モーラ宣言に合せられた可能性がある。」と解釈したように、一字二拍（モーラ）という原則を破るものは長音有無の揺れと発声的統一が原因である。

また、一字三モーラ「貫（コワン）」、「圏（チュアン）」、「元（ユアン）」、「莊（チョワン）」の字音はあるが、従来の漢字音に依るようになった「元（ユアン→ゲン）」を除いて、現在では普通「貫（ガン）」、「圏（チェン、チャン）」、「莊（チャン）」になっており、古い読み方の簡略化された形で、一字二拍（モーラ）の原則に沿っている。

したがって、現代北京語から借用した読み方には、以上の長音有無の揺れと発声的統一という理由、そして古い読み方を除けば、ほぼ一字二拍（モーラ）である。つまり、ほぼ一字二拍（モーラ）に固定する読み方の特徴は従来の漢字音に見られないもので、宋音、唐音にも見られないものである。

4-2-2 従来の漢字音との連続関係

麻雀用語に見られた現代北京語から借用した読み方の特徴によると、従来の漢字音、特に宋音・唐音から継承する特徴が多い一方、独自な特徴を持っていることがわかった。その音韻的特徴を踏まえ、既に先行研究で明らかにされている呉音、漢音、宋音、唐音の連続関係に沿い、表四の漢字音の音韻的特徴をベースに、麻雀用語における現代北京語から借用した読み方を加え、その音韻的特徴の連続関係と違いを表三十七のようにまとめてみる。

表三十七 現代北京語から借用した読み方を加えた漢字音の音韻的特徴

音韻的特徴	呉音	漢音	宋音	唐音	麻雀用語
連濁の有無	よくある	殆どなし	殆どなし	殆どなし	—
清濁音の区別	ある	なし	なし	なし	なし
入声音の有無	ある	ある	消滅する	なし	なし
軽唇音の表記	ハ、バ、マ	ハ、バ	ハ、バ	ハ、ワ、ア	ファ、ワ、ア
重唇音の表記	ハ、バ、マ	ハ、バ、マ	ハ、バ、マ	バ、パ、マ	パ、マ
軽唇音と重唇音 の区別	なし	混同あり	混同あり	ある	ある
喉音（曉母） の表記	カ	カ	カ、ハ	ハ	ハ (h-)、 シャ (x-)
濁音の有無	ある	ある	ある	ある	なし
拍（モーラ）	1～2	1～2	1～2	1～3	2

表三十七にまとめたように、各々の音韻的特徴の違いがはっきり見られる。まずは連濁の有無について、呉音は連濁が多発しているのに対して、漢音、宋音、唐音にはほとんど発さない。現代北京語から借用した読み方には連濁はあるものの、不安定要素を含む読み方がほとんどで、読み方自体に濁音を使わないのが原則である。

また、清濁音の区別について、漢音が伝来した時代には、中国語における清濁の区別がなくなっており、宋音・唐音もそれを受けて、清濁の区別がない。現代北京語から借用した読み方に至っては、読み方自体に濁音を使わないのが原則なため、清濁の区別は当然つかない。

次に、入声音の有無について、呉音・漢音には入声音の反映が語尾の「ク・チ・ツ」（歴史的仮名遣いでは語尾が「ふ」になるものも入声音の反映であるが、現代仮名遣いに基づいて討論するため、ここでは除外する）に見られるが、宋

音以降は入声音が消滅、唐音・現代北京語から借用した読み方にもそれが見られないのである。そもそも現代北京語には入声音が存在しないため、音韻的には入声音を反映する仕方がない。

そして、軽唇音の表記・重唇音の表記、そして軽唇音と重唇音の区別について、呉音においては軽唇音・重唇音を問わず、全て「ハ、バ、マ行」で、漢音においては、同じ「ハ、バ、マ行」で表記するが、「マ行」は重唇音にしか使わない。宋音は基本的にそれを継承しているが、唐音においては軽唇音 *f*-と重唇音 *p*-が区別されるようになり、それぞれ「ハ行」と「パ行」に分けた。現代北京語から借用した読み方に至ると、軽唇音 *f*-は「ハ行」から「ファ行」になり、重唇音 *p*-は「パ行」のままである。つまり、唐音以降、軽唇音・重唇音が区別するようになった。

喉音（曉母）の表記について、呉音・漢音には一律「カ行」になる。宋音になると、「ハ行」が加わった形に、唐音になると、「ハ行」となるものがさらに増加した。現代北京語から借用した読み方に至ると、現代北京語における喉音（曉母）が *h*-、*x*- に分化したため、「カ行」表記が完全に消滅した一方、*h*-は「ハ行」に、*x*-は「シャ行」で表記するようになった。

最後に、濁音の有無、拍（モーラ）構成について、現代北京語から借用した読み方は濁音が完全に消滅、音節モーラ構成もほぼ一字二モーラという原則に固定するようになった。これは従来漢字音、特に宋音・唐音にも見られない特徴である。濁音が消滅したのは原語の現代北京語の音韻的反映で、一字二拍（モーラ）という原則に固定したのも、音韻的統一と従来漢字音との区別がつく効果があったと考えられる。

つまり、麻雀用語における現代北京語から借用した読み方の特徴を従来の漢

字音と比べた結果、単に近現代中国語に由来したため、近現代中国語の真似にとどまるのではなく、音韻的特徴は従来の漢字音から継承したものがあつた一方、独自な特徴を有している。現代北京語から借用した漢字表記語の読み方は体系的にまだ全貌を明かされていないが、呉音、漢音、宋音、唐音の連続関係が見られるように、一種の漢字音と看做しても良いのではないかと考えられよう。

近年では、韓流「ハンリゅう」のように、中華文化圏に属する中国、香港、台湾から伝わってきた娯楽文化が日本に伝わったブームを、「華流」と命名されたこともある⁶⁰。そのため、この時期に入った新しい漢字音は、現代北京語との相似度が高いことから、「華音（かおん）」と呼称づけておく。

4-2-3 新しい漢字音「華音」の成立

新しい漢字音「華音」の成立は、麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方、すなわち現代北京語から借用した読み方の音韻的特徴と従来の漢字音との連続関係を明らかにしたことで、新しい漢字音「華音」が成立する可能性を示唆した。

次に、読み方の不安定要素 (a) 訛った読み方と連濁形がある、(b) 従来の漢字音の干渉を受けた読み方がある、(c) 中国方言（呉語）による影響がある、(d) 日本語の音韻に合わせて改変された読み方があるを除いた上に、麻雀用語における現代北京語から借用した読み方の転記表記の原則から「華音」の成立を裏付ける。

表三十八、三十九は原語と思われる現代北京語から日本語に転記する際に、どのような原則に沿って現在の表記になっている転記表記の原則である。なお、

⁶⁰ 例えば、近代映画社によって発売される雑誌「ASIAN WAVE 華流」（季刊）が一例である。

#のついた読み方は麻雀用語に見られないが、ほかの読み方から類推する形式で補うもので、?のついた読み方はほか読み方から類推できない不明な箇所を表示する。

表三十八 転記表記の原則 (声母類)

ピン音	∅	b	p	m	f	d	t	
読み方	韻母類参照	パ行		マ行	ファ行	タ行* ⁶¹		
ピン音	n	l	r	g	k	h	j	q
読み方	ナ行	ラ行		カ行	ハ行	チャ行		
ピン音	x	zh	ch	sh	z	c	s	
読み方	シャ行	チャ行		シャ行	ツァ行	サ行		

表三十九 転記表記の原則 (韻母類)

ピン音	i	u	ü	a	o
読み方	イ段	ウ段	イ段+ユ	ア段	オ段
∅	イー	ウー	ユイ	アー#	オー#
ピン音	e	ê	ai	ei	ao
読み方	ア段、オ段	エ段	ア段+イ	エ段	ア段+オ
∅	アー#、オー#	エー#	アイ#	エー#	アオ#
ピン音	an	en	ang	eng	er
読み方	ア段+ン	エ段+ン	ア段+ン	オ段+ン	?
∅	アン	エン#	アン#	オン#	?
ピン音	ia	ie	iao	iu	ian
読み方	ア段	イ段+エ	ヤ拗音+オ	ユ拗音	エ段+ン
∅	ヤー#	イエ	ヤオ	ユー	エン#

⁶¹ 「ti, di」に対応するタ行のイ段音と「tu, du」に対応するタ行のウ段音はそれぞれ「チ」と「ツ」になる。しかし、「チ」と「ツ」は現代日本語では音価が「ti」と「tu」になっていないため、一部の読み方は適用できないため、不明?として扱う。

ピン音	in、ing	iang	ua	uo	uai
読み方	イ段＋ン	ヤ拗音＋ン	オ段＋ワ	オ段	不明
∅	イン#	ヤン#	ワー#	ウオー#	ワイ#
ピン音	ui	uan、uang	uen	ong=eng	
読み方	オ段＋イ	ア段＋ン	ウ段かオ段＋ン	オ段＋ン	
∅	オイ#	ワン	ウン#、オン#	オン#	
ピン音	üe	üan	ün	iong	
読み方	ユ拗音＋エ	ヤ拗音＋ン	?	?	
∅	ユエ	ユアン	?	?	

表三十八、三十九にまとめたように、麻雀用語に見られる従来の漢字音に依らない読み方から、以上のような転記表記の原則がまとめられる。声母について、「d」、「t」は類推できないが、ほかは規則が明瞭である。また、韻母について、#類推の形式、?不明な箇所、複数の規則によるものがあり、全ての韻母の転写法に規則を当てることが出来なかったが、規則そのものは見られる。

表三十八、三十九の転記表記の原則に見られるように、不安定要素を排除してまとめた結果、麻雀用語に見られる従来の漢字音に依らない読み方は無造作に日本語に転写したのでなく、現代北京語のピン音に沿った一種の規則を有している。まだ 100%完全ではないが、麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方が現代北京語のピン音に対応する規則によって、カテゴリー化することが可能で、新しい漢字音「華音」の成立を裏付けられる。

さらに見やすくするように、以上の転記表記の原則に基づいて、麻雀用語における華音の字音転記対照一覧表を作成した。詳しくは付表の付表二～四を参照されたい。

4-3 まとめ

本章は麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方の字音対応表に沿い、複数の読み方と現代北京語と食い違っている読み方について、(a) 訛った読み方と連濁形、(b) 従来の漢字音の干渉、(c) 中国方言（呉語）による影響、(d) 日本語の音韻的規則による改変などの理由で説明した。その不安定要素を排除した上に、従来の漢字音に依らない読み方に (a) 読み方と漢字表記の対応関係及び (b) 読み方と現代北京語との対応関係が存在していることを検討した。

次に、その字音対応関係を明らかにした上に、従来の漢字音に依らない読み方の特徴を (a) 宋音・唐音の特徴を多く継承、(b) 従来の漢字音に見られない音結合、(c) 濁音の消滅、(d) 一字二拍（モーラ）の構造と割り出したことができた。従来の漢字音と比べた結果、その読み方の音韻的特徴は従来の漢字音から継承したものがあつた一方、独自な特徴を有していることがわかり、新しい漢字音「華音」の成立の可能性を示唆した。

最後に、従来の漢字音に依らない読み方を多用する麻雀用語から、新しい漢字音「華音」の成立を裏付けるために、現代北京語から華音に転記する際に、どのような転記表記原則に則つたかを述べた。規則にいささか不明なところが残されているものの、麻雀用語に見られる従来の漢字音に依らない読み方は単に無規則で日本語に転写したのでなく、一つの規則でカテゴリー化できるため、新しい漢字音「華音」の成立を裏付けられた。



第五章、結論

5-1 まとめ

本稿は第一章で麻雀用語を研究対象として捉える理由を述べ、研究目的・方法、研究の位置づけ及び研究成果の応用に分けて述べた。第二章では、麻雀用語と漢字音の先行研究を把握することで、研究目的が達成する糸口が見つかることと説明した。

研究目的（一）麻雀用語における漢字表記語の読み方の成立経緯を究明することの達成について、第三章では、まず麻雀用語における漢字表記語の読み方にはどれほど従来の漢字音に依らない読み方があるか、そして従来の漢字音に依らない読み方は現代北京語との相似度を比べた。その結果として、現代北京語に近い読み方をする用語が多い一方、一部の麻雀用語が現代北京語に近い読み方から従来の漢字音に変化したことを論証した。そして、麻雀用語における漢字表記語の読み方の成立経緯について、現代北京語に近い読み方を取る場合は、(a) 音韻的理由、(b) 意味的理由、(c) 出自然的理由に辿りつけると仮説を立てた。一方、従来の漢字音に依る場合は (a) 書記的理由、(b) 意味的理由、(c) 表現的理由に辿りつけると仮説を立てた。麻雀用語の読み方の成立経緯は恣意的に読み方が当てられるのではなく、それぞれの用語にそれぞれの理由により、現在のように成り立っていることを突き止めた。

研究目的（二）麻雀用語から新しい漢字音が成立する可能性を検討することの達成について、第四章では、まず麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方の字音対応表を作った。その中から、複数の読み方や現代北京語とずれがある語に対して、不安定要素 (a) 訛った読み方と連濁形がある、(b) 従来の漢字音の干渉を受けた読み方がある、(c) 中国方言（呉語）による影響がある、

(d) 日本語の音韻に合わせて改変された読み方があるのを割り出し、従来の漢字音に依らない読み方における字音対応関係を確定させた。そして、麻雀用語における従来の漢字音に依らない読み方の音韻的特徴は、(a) 宋音・唐音の特徴を多く継承、(b) 従来の漢字音に見られない音結合、(c) 濁音の消滅、(d) 一字二拍（モーラ）の構造、と四つ分け、従来の漢字音、特に宋音・唐音から継承する特徴を有している一方、独自な特徴を持っているという連続関係があり、新しい漢字音「華音」の成立を裏付けた。

本稿は以上の手順を踏まえ、麻雀用語の漢字表記語を取り上げ、その読み方の特徴及び新しい漢字音の成立する可能性を検討してみた。そして、従来の漢字音に依らない読み方は従来の漢字音との連続関係から、新しい漢字音「華音」として成立する可能性が高いという結論に達した。

5-2 研究制限及び今後の課題

麻雀用語は近現代中国語からも輸入された語彙で比較的に系統的に日本語に伝わってきたと言えるが、その語例数は200しかないのがネックである。語例数が少ないといえども、近現代中国語からの語彙の中に一つの Kategorie として自立しているため、その特徴を的確に捉えるのがメリットである。つまり、今後の課題として、麻雀用語だけでなく、ほかの近現代中国語からの語彙を研究することによって、麻雀用語に見られる読み方の特徴を見直す必要がある。

さらに、麻雀用語が元々専門用語・隠語（ジャーゴン）のような性質を持ち合わせているため、麻雀用語を規範する公式用語集が存在していない。また、麻雀役・麻雀牌が比較的に共通しているのに対して、一般麻雀用語は個人・地方による使用傾向の温度差が存在している。特に麻雀牌、一般麻雀用語は華音

と従来の漢字音による複数の読み方を持ち合わせているものもある。そのため、麻雀用語における読み方の変化と使用傾向を的確に捉える必要がある。

5-3 研究成果の応用

研究成果の応用として、今まであまり解明されていない近現代中国語からの語彙の謎は、麻雀用語における漢字表記語の読み方を明らかにしたため、近現代中国語からの語彙に関する研究の継起が期待される。日本語における近現代中国語からの語彙は麻雀用語のほかに、武術、食べ物、人名、地名などが挙げられる。それらの語彙を研究することによって、近現代中国語からの語彙の全体像を浮き彫りにすることができる上、日中語彙交流に繋がれることから応用できるのではないかと考えられる。

また、近現代中国語の語彙を日本語に輸入する時、それを定める規制が存在していない。特に近現代中国語からの語彙は主として現代北京語が媒介しているため、現代北京語から転記する読み方の規範が定められることが望ましい。これに先立ち、麻雀用語は現代北京語から転記する読み方が多く存在しており、新しい漢字音として成立する規則を有していることを明らかにしたため、ほかの近現代中国語からの語彙の読み方の仕組みを検証することによって、転記法の基準を定めることに応用できるのではないかと考えられる。



参考文献

・日本語

- 石野博史 (1977) 『岩波講座 日本語 第3巻～外来語の問題～』 岩波書店
- 石綿敏雄 (1985) 『日本語のなかの外国語』 岩波書店
- 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』 東京堂
- 榎垣実 (1963) 『日本外来語の研究』 研究社
- 岡田袈裟男 (2006) 『江戸異言語接触 蘭語・唐話と近代日本語』 笠間書院
- 金子尚一 (1998) 「ことばと文字—マーじゃん・麻雀・麻将—」 『国文学解釈と鑑賞』 63 (1) P.149-151、至文堂
- 狩野洋一 (2008) 『3日間でわかる麻雀入門』 日本文芸社
- 木村哲也 (1994) 「中国語起源の外来語表記について—マーじゃん用語に題材をとって—」 『人文論究』 (第57号) P.43-58、北海道教育大学函館人文学会
- 小出敦 (2007) 「日本漢字音・中国中古音対照表」 『京都産業大学論集 人文科学系列』 (37) P.133-156、京都産業大学
- 小林千草 (2009) 『シリーズ現代日本語の世界4 現代外来語の世界』 朝倉書店
- 陣内正敬 (2007) 『外来語の社会言語学』 世界思想社
- 高松政雄 (1986) 『日本漢字音概論』 風間書房
- 田島優 (1998) 『近代漢字表記語の研究』 和泉書院
- 田島優 (2008) 『シリーズ現代日本語の世界3 現代漢字の世界』 朝倉書店
- 千田俊太郎 (2009) 「麻雀ジャーゴン試論——麻雀ジャーゴン記述と社会方言、集團語の一般論に対する問題提起」 『日本語研究センター報告』 (16) P.15-36、大阪樟蔭女子大学日本語研究センター
- 藤堂明保 (1982) 『漢字の過去と未来』 岩波新書

沼本克明（1991）『日本漢字音の歴史』東京堂出版

半沢幹一・安倍清哉・小野正弘・金子弘編（2002）『日本語の歴史』おうふう

松村明編（2006）「呉漢音対照表」『大辞林』第三版特別ページ P.40-41、三省堂

三樹敏編（2011）『日本語学 VOL.30-3 特集：漢字音研究の現在』明治書院

宮島達夫（2007）「語彙調査からコーパスへ」『日本語科学』巻 22、国立国語研究所

内閣告示第二号（1991）「外来語の表記」文部科学省

湯沢質幸（1987）『唐音の研究』勉誠社

・中国語

胡適著、欧陽哲生編（1998）『胡適文集』北京大学出版社

徐珂原著（1986）『清稗類鈔』中華書局

石汝杰、宮田一郎編（2005）『明清吳語詞典』上海辞書出版社

中華民国教育部国語推行委員会（2011）「中文譯音使用原則」中華民国教育部

・韓国語

文教部告示第 85-11 号（1986）「외래어 표기법（外来語表記法）」韓国国立国語院



語例出典

・一般書籍

井出洋介（1997）『平成版 麻雀新報知ルール』報知新聞社

井出洋介（2010）『マンガでわかる！東大式麻雀入門』池田書店

大和田秀樹（2008-2011）『ムダヅモ無き改革』1-6巻 竹書房

小林立（2010）『咲 -SAKI- ラブじゃん』スクウェア・エニックス

小林立（2007-2011）『咲 -SAKI-』1-8巻 スクウェア・エニックス

とつげき東北（2004）『科学する麻雀』講談社

とつげき東北（2009）『おしえて！科学する麻雀』洋泉社

麻雀博物館編（2005）『麻雀の歴史と文化』竹書房

・辞書、事典

白川静（1996）『字通』平凡社

小学館編（1972）『大日本百科事典（ジャポニカ）』巻16、小学館

小学館編（2000）『日本国語大辞典』小学館

平凡社編（1933）『大百科事典』巻24、平凡社

小学館『大辞泉』編集部（1998）『大辞泉』小学館

小学館国語辞典編集部（2版 2000-2002）『日本国語大辞典』小学館

藤堂明保等編（1993）『漢字源』EPWING版 学習研究社

新村出編（2000）『広辞苑』岩波書店

野村雅昭・小池清治編（1992）『日本語事典』東京堂出版

フランク・B・ギブニー編（初版 1975、2版 1994）『ブリタニカ国際大百科事典』

ティビーエス・ブリタニカ

・ウェブサイト

JAPANKNOWLEDGE : <http://www.jkn21.com/>

NPO 法人日本麻雀連合会 : <http://mahjongn.com/>

オンライン麻雀ゲーム「天鳳」 : <http://tenhou.net/>

オンライン麻雀ゲーム「雀 REVO」 : www.jan-revo.com/

オンライン麻雀ゲーム「雀龍門」 : <http://janryumon.plaync.jp/>

現代標準漢語與粵語對照資料庫 : <http://win2003.chi.cuhk.edu.hk/hanyu/> (香港中文大學による)

呉音小字典 : <http://wu-chinese.com/minidict/> (呉語協会による)

台湾閩南語常用詞辞典 : <http://twblg.dict.edu.tw> (中華民国教育部による)

日本プロ麻雀協会 : <http://npm2001.com/>

日本プロ麻雀連盟 : <http://ma-jan.or.jp/index.php>

日本麻雀機構 : <http://www.mahjankikou.jp/index.html>

麻雀国語辞典 : http://www.geocities.jp/konchan_page/dic.htm



付表

付表一 麻雀用語における漢字表記と一般用語の漢字表記の意味違い

漢字表記	従来の漢字音に依る読み方	現代北京語に近い読み方
包	読み方：ホウ	読み方：パオ
	意味：つつむ	意味：責任払い
	語例：包囲、包装、包括	語例：包、包責
吃	読み方：キツ	読み方：チー
	意味：どもる、食べる	意味：上家の捨て牌を拾う
	語例：吃音、吃驚	語例：吃
幢	読み方：ドウ	読み方：トン
	意味：旗、とぼり	意味：上下1組の牌
	語例：幢幡、法幢	語例：一幢
吊	読み方：チョウ	読み方：チャオ
	意味：つるす、単位を表す	意味：待ち
	語例：懸吊、一吊	語例：単吊待ち
断	読み方：ダン	読み方：タン
	意味：たつ、切る、辞める、きっぱり、ことわる	意味：そのものがない
	語例：切断、断念、断然、無断	語例：断么九
对	読み方：タイ	読み方：トイ
	意味：向いあう、比較、応える	意味：牌が二つ、向こう
	語例：対抗、対比、対等、対応	語例：対子、対面、対家
翻(翻)	読み方：ホン	読み方：ファン、ハン
	意味：翻る、覆る、形をかえる	意味：単位を表す
	語例：翻弄、翻然、翻訳	語例：一翻、翻数
槓	読み方：コウ	読み方：カン
	意味：てこ	意味：同じ牌が4つが揃う
	語例：槓桿	語例：槓、槓子
和	読み方：ワ	読み方：ホー、フ(一)
	意味：穏やか、仲良くする、合わせる、数値	意味：アガる
	語例：温和・和解・調和・総和	語例：和了・対々和・二家和

混	読み方：コン	読み方：ホン
	意味：まじる、濁っている	意味：同じ属性の数牌＋字牌が揃う役に関連するもの
	語例：混合、混冥、混沌	語例：混一色、混老頭
家	読み方：カ、ケ	読み方：チャ
	意味：いえ、住まい、一族、流派、職業	意味：競技者
	語例：家族、画家、徳川家	語例：上家、散家、荘家
尖	読み方：セン	読み方：チェン
	意味：とがる、鋭い	意味：端から3番目の牌
	語例：尖端、尖鋭、尖兵	語例：尖張牌
嵌	読み方：カン	読み方：カン（同じ）
	意味：はまる	意味：2枚数牌の間の牌を待つこと
	語例：嵌入、嵌合	語例：嵌張待ち、嵌塔
刻	読み方：コク	読み方：コー
	意味：刻む、厳しい、時	意味：同じ牌が3つ揃う
	語例：彫刻、深刻、遅刻	語例：暗刻、刻子
了	読み方：リョウ	読み方：ラ
	意味：終わる、悟る、明らか	意味：した、しまった
	語例：完了、了解、了然	語例：和了
栄	読み方：エイ	読み方：ロン
	意味：栄える、名誉	意味：出アガりで和了
	語例：繁栄、栄誉	語例：栄、栄和
門	読み方：モン	読み方：メン
	意味：出入口、一族	意味：牌の揃い、手牌
	語例：門札、門徒	語例：門前、絶一門
面	読み方：メン	読み方：メン
	意味：顔、おもて、内容、抽象的箇所	意味：競技者、牌が揃う
	語例：顔面、面前、文面、方面	語例：面子
摸（模）	読み方：モ	読み方：モー
	意味：手探り、似せる	意味：牌を取る、ツモる

	語例：模索、摸倣	語例：自摸和、摸打
牌	読み方：ハイ	読み方：パイ
	意味：ふだ、こま	意味：麻雀牌そのもの
	語例：位牌、骨牌	語例：洗牌、倒牌
平	読み方：ヘイ、ビョウ	読み方：ピン
	意味：平たい、偏らない、普通、平らげる、穏やか	意味：符がない
	語例：平坦、平原、公平、平均、平常、平定、平和	語例：平和、門断平
清	読み方：セイ、ショウ	読み方：チン
	意味：清い、さっぱりして気分がよい、綺麗にする	意味：同じ属性の数牌揃う役に関連、副露がない
	語例：清酒、清流、清涼、清算	語例：清一色、門前清
雀	読み方：ジャク	読み方：ジャン
	意味：すずめ	意味：麻雀そのもの
	語例：燕雀、雀躍、雀羅、朱雀	語例：麻雀、雀荘、雀士、雀鬼
立	読み方：リツ	読み方：リー
	意味：たつ、なりたつ	意味：立直に関連するもの
	語例：起立、立春	語例：立のみ、立直
洗	読み方：セン	読み方：シー
	意味：あらう	意味：かき混ぜる
	語例：洗面、洗濯	語例：洗牌
塔	読み方：トー	読み方：ター
	意味：高くそびえ立つ建造物	意味：関連する牌の揃い
	語例：仏塔、鉄塔	語例：塔子、嵌塔
聴	読み方：チョウ	読み方：テン
	意味：きく	意味：あと1枚であがる
	語例：聴覚、聴取	語例：聴牌、振り聴
王	読み方：オウ	読み方：ワン
	意味：君主、首位	意味：(不明)
	語例：大王、王位、擊墜王	語例：王牌
向	読み方：コウ	読み方：シャン

	意味：むく、おもむき、以前	意味：単位を表す
	語例：向上、傾向、向後	語例：一向聴、二向聴
張	読み方：チョウ	読み方：チャン
	意味：はる、言い張る、数詞	意味：待ちの状態や枚数
	語例：緊張、主張、一張	語例：三面張、辺張
直	読み方：ジキ、チョク	読み方：チ
	意味：すぐ、まっすぐ、歪みがない、値段、つとめ	意味：立直に関連するもの
	語例：直前、直進、実直、安直、当直	語例：立直
子	読み方：シ	読み方：ツ（一）
	意味：こども、男子の敬称、たね、小さな物利息	意味：牌そのものを指す（接尾辞）
	語例：実子・君子・原子・利子	語例：対子、塔子、面子
荘	読み方：ショウ、ソウ	読み方：チャン
	意味：荘園そのもの、店、別宅、おごそかなさま	意味：親、ゲームそのもの
	語例：荘園、銭荘、別荘、荘厳	語例：荘家、一荘、半荘

注：本表は『広辞苑』、『漢字源』、『大辞泉』をもとに作成したものである。

付表二 字音転記対照一覧表 (ø、b、p、m、f、d、t)

	ø	b、p	m	f	d、t
i	イー (一)	ピー (壁)	ミー	—	不明
u	ウー (五)	プー (不)	ムー	フー (副)	不明
ü	ユイ (魚)	—	—	—	—
a	アー	パー (八)	マー (麻)	ファー (発)	ター (大)
o	オー	ポー	モー (摸)	フォー	—
e	アー、オー	—	マー、モー	—	ター、トー
ê	エー	—	—	—	—
ai	アイ	パイ (牌)	マイ	—	タイ (帯)
ei	エー	ペー (北)	メー	フェー	テー
ao	アオ	パオ (包)	マオ	—	タオ (倒)
ou	オー	ポー	モー	フォー	トー (頭)
an	アン (安)	パン (板)	マン (満)	ファン (翻)	タン (単)
en	エン	ペン	メン (門)	フェン	—
ang	アン	パン	マン	ファン	タン
eng	オン	ポン (碰)	モン	フォン (風)	トン (燈)
er	不明	—	—	—	—
ia	ヤー	—	—	—	—
ie	イエ (葉)	ピエ	ミエ	—	不明
iao	ヤオ (么)	ピャオ	ミャオ	—	不明
iu	ユー (遊)	—	ミュー	—	不明
ian	エン	ペン (辺)	メン (面)	—	テン (天)
in、ing	イン	ピン (餅)	ミン (明)	—	不明
iang	ヤン	—	—	—	—
ua	ワー	—	—	—	—
uo	ウオー	—	—	—	トー
uai	ワイ	—	—	—	—
ui	オイ	—	—	—	トイ (対)
uan、uang	ワン (萬)	—	—	—	タン (断)
uen	ウン、オン	—	—	—	不明、トン
ong	オン	—	—	—	トン (東)
ue	ユエ (月)	—	—	—	—

uan	ユアン (元)	—	—	—	—
un	不明	—	—	—	—
iong	不明	—	—	—	—

付表三 字音転記対照一覧表 (n、l、r、g、k、h、j、q)

	n	l、r	g、k	h	j、q
i	ニー	リー	—	—	チー (即)
u	ヌー	ルー	クー	フー	—
ü	ニユー	リユー (緑)	—	—	チュー
a	ナー	ラー	カー	ハー	—
o	—	—	—	—	—
e	ナー、ノー	ラー (了)	コー (客)	ホー (和)	—
ê	—	—	—	—	—
ai	ナイ	ライ	カイ (開)	ハイ (海)	—
ei	ネー	レー	ケー	ヘー	—
ao	ナオ	ラオ (老)	カオ (高)	ハオ (好)	—
ou	ノー	ロー (露)	コー (口)	ホー	—
an	ナン (南)	ラン	カン (崁)	ハン	—
en	ネン	レン (人)	ケン	ヘン	—
ang	ナン	ラン	カン (櫃)	ハン	—
eng	ノン	ロン	コン	ホン	—
er	—	—	—	—	—
ia	—	—	—	—	チャー (家)
ie	ニエ	リエ	—	—	チエ
iao	ニャオ	リャオ	—	—	チャオ
iu	ニユー	リユー	—	—	チュー (九)
ian	ネン	レン (連)	—	—	チェン (見)
in、ing	ニン	リン (零)	—	—	チン (清)
iang	ニャン	リャン (両)	—	—	チャン (槍)
ua	—	—	コワ	ホワ (花)	—
uo	ノー	ロー	コー	ホー	—
uai	—	—	不明	不明	—
ui	—	—	コイ	ホイ	—
uan、uang	ナン	ラン	カン (貫)	ハン	—

uen	—	ロン (輪)	クン、コン	ホン (混)	—
ong	ノン	ロン (栄)	コン	ホン (紅)	—
ue	ニユエ	リュエ	—	—	チュエ
uan	—	リヤン	—	—	チャン (圈)
un	—	—	—	—	不明
iong	—	—	—	—	不明

付表四 字音転記対照一覧表 (x, zh, ch, sh, z, c, s)

	x	zh, ch	sh	z, c	s
i	シー (喜)	チー (吃)	シー (十)	ツー (自)	スー (四)
u	—	チュー	シュー	ツー	スー
ü	シュー	—	—	—	—
a	—	チャー	シャー	ツァー	サー
o	—	—	—	—	—
e	—	チャー チョー	シャー ショー	ツァー ツォー	ソー (色)
ê	—	—	—	—	—
ai	—	チャイ	シャイ (骰)	ツァイ	サイ (賽)
ei	—	—	シェー	ツェー	—
ao	—	チャオ	シャオ (少)	ツァオ	サオ
ou	—	チョー (籌)	ショー	ツォー	ソー
an	—	チャン	シャン	ツァン	サン (三)
en	—	チェン	シェン	ツェン	セン
ang	—	チャン (張)	シャン (上)	ツァン	サン
eng	—	チョン	ション (生)	ツォン	ソン
er	—	—	—	—	—
ia	シャー	—	—	—	—
ie	シエ	—	—	—	—
iao	シャオ	—	—	—	—
iu	シュー	—	—	—	—
ian	シェン (先)	—	—	—	—
in, ing	シン (星)	—	—	—	—
iang	シャン (向)	—	—	—	—
ua	—	チョワ	ショワ	—	—

uo	—	チョー (卓)	ショー	ツオ (錯)	ソー (索)
uai	—	不明	不明	—	—
ui	—	チョイ	ショイ	ツオイ	ソイ
uan、uang	—	チャン (荘)	シャン (双)	ツァン	サン (算)
uen	—	チュン、チョン	シュン (順)	ツン、ツォン	スン、ソン
ong	—	チョン (種)	—	ツォン	ソン
ue	シュエ	—	—	—	—
uan	シェン	—	—	—	—
un	不明	—	—	—	—
iong	不明	—	—	—	—

注：実際に麻雀用語に使われている従来の漢字音に依らない読み方に対応する漢字表記を () 内に付けておく。また、「—」は該当ピン音の読み方が存在しないことを示す。

